

リリカルライダー——悪とされた者の物語

エイワス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面の戦士達と敵対する者がいた。同じ仮面の戦士でありながら、誰からも『悪』と決められて、生と死を繰り返してきた戦士。

4回全て悪とされて、5回目はどう歩むのか。

仮面の戦士がいない世界で、少年は再び生を得る。

———さあ、悪とされた少年の話を始めよう。

目次

転生者設定	1
プロローグ	5
新たな	9
拾い物	14
感謝の言葉	17
腕直し	19
裏方	24
開発	28
死神	31
二戦目	38
失われた気持ち	44
決闘	48
娘	54
実戦	60
地球の記憶	67
プレシア	74
戦後	80
流星の嵐	85
闇の書	92
監視者へ降りかかる災い	97
欲望に抗う仮面	101
バナナって言いたくなくなってしまう	109
V S ヴオルケンリッター（一人抜き）	114
静かなる対立	120

魔導師へ恐怖を

クロノ、大地に立つ

諦めなければ終わらない

転生者設定

黒崎 幽雅 (くろさき ゆうが)

- ・性別 男
- ・年齢 9歳
- ・魔力 SS
- ・好きなもの コーヒー、静かな時間
- ・嫌いなもの 正義感高い人、自分が敵と認識したもの
- ・神様からの贈り物 ゾーンメモリ
- ・転生特典

メテオドライバー

ワイズドライバー

ブレイクガンナー

オーガドライバー

戦極ドライバー (オレンジ除く全ロックシード)

ロストドライバー (T2ガイアメモリ)

- ・自己製作したドライバー

ドライバー

ゲネシスドライバー

経歴

今回で五度目の転生をする今作の主人公。転生特典は五回目記念もあつて六個貰っている。転生した時の衝撃で生前の記憶が殆ど消えている。ライダー大戦を二度勃発させ、一度目は怪人を、二度目はダークライダーと怪人の両方を使役していた。

一度目の転生の時にロイミュード・プロトゼロに転生しており、プロトドライブとして戦う。ナンバーを破壊する機能がなかったので永遠と戦い続けて、ナンバー002ハートロイミュードに破れ、回収される。

ドライブドライバーを元にして製作されたブレイクガンナーをその時に貰っている。

本来ならばブレイクガンナーを貰った時点でハート達を裏切る筈だったが、ロイミュードに転生したため、そのようなことを考えられなくなった。

ハートの親友として過ごしており、よくブレンとメディックに嫉妬されていた。

最初はドライブと戦った時は戦闘経験の差で圧倒していたが、三回目以降はベルトさんもビックリの成長で敗れる。

この時にブレイクガンナーは破壊され、逃げ道が無くなった所を、助けに来たハートによって救われる。

そしてハートがブレンとゴミ科学者蛮野に頼んで作らせたのがドライブドライブバー、そしてタイプネクスト。

このドライブドライブバー制作には幽雅も関わっていた。いわば、三人の最高傑作。

次に戦った仮面ライダーマツハは修理したチェイサーで圧勝。地味にチェイサーの性能が上がっていた。

ドライブタイプフォーミュラと、仮面ライダータイプネクストとして戦い、本来ならフリーズロイミュードに殺される筈のドライブはここで死亡。幽雅も再生不能クラスのダメージをおってしまう。

最終決戦前にギリギリ回復し、ハート、ブレン、メディックが幽雅の為に作ってくれた、とあるシフトカーを受け取り、仮面ライダーマツハと共にゴールドドライブを撃破。

だがギリギリの回復だったので、新しいシフトカーに体が耐えきれず、シフトネクストが進化した、シフトスペシャルをドライブに渡すようにマツハに頼み、その場で死亡。

見事に劇場版の可能性を壊し、勝利フラグをたてた。

二度目の転生ではライオンオルフェノクとして生まれ、木場勇治たちとともに行動する。基本的には戦うことはしていなかったが、スマートブレイン二代目社長の村上峽児に、スマートブレインに従わなければ木場勇治達を殺す、と脅されて、スマートブレインで汚れ仕事を始める。だがその後、スパイダーオルフェノクである澤田亜紀のラッキークローバーの座を求め、澤田亜紀を襲おうとするが、周りに

ファイズとカイザ、デルタ、そして木場勇治がいたため、オルフェノクではなく生まれた時から所持していたブレイクガンナーで魔進チエイサーに変身して、全員の目の前で澤田亜紀を殺害。その後ラツキークローバーに入る。

木場勇治が社長になる前に、魔進チエイサーとしてファイズと戦い敗北する。

三度目と四度目は……………。

現在は八神家に居候中。

衛宮 当麻（えみや とうま）

- ・性別 男
- ・年齢 9歳
- ・魔力 SS
- ・好きなもの 人助け
- ・嫌いなもの 犯罪者、人を平気で傷付ける人
- ・特典

無限の剣製

・デバイス

アーチャー

二人目の転生者。特典として無限の剣製を貰っており、強化、解析、投影が衛宮士郎よりも強力なものとなっている。強化は魔力を込めた分だけ威力が増し、偽・螺旋剣Ⅱに関しては威力の上昇は原作より遥かに高い。

偽・螺旋剣Ⅱでチエイサーの必殺技と引き分けるくらいには強い。衛宮士郎と違い魔力が豊富で、尚且つ剣の才能があり、その剣は戦闘民族として知られる高町士郎も十五分位打ち合えるほど。

魔法で空を飛ぶ時はチエイサーと同じ、魔力で足場を作って跳躍している。身体能力が知らぬ間にエミヤと同程度になっているため、こちらの方が普通に飛ぶよりも速い。

不幸な人全てを救いたいと思っており、幽雅に否定されても未だに幽雅と協力しようとしている。知らぬ間になのはに好意を向けられ

ているが、本人が鈍感なので気付いてはいない。

夢原 美結（ゆめはら みゆ）

・年齢 9歳

・性別 女性

・魔力SSS

・特典

魔法の才能

・デバイス

イカレタ爺作のステッキ（サファイア）

三人目の転生者にして唯一の女性。容姿が髪色が違う美遊・エーデルフェルトにそっくり。特典で魔法の才能を望んだら、何故かカレイドステッキのサファイアまで付いてきた。だがステッキがプリヤ的なものではなく、もつとりリカルさが増したものになった。具体的には身長と同じくらい長くなった（通常モード）。他にも柄が短縮され、魔力刃が形成される。基本的にオールラウンダーであり、砲撃はなのはに少し劣り、機動性はフェイトに少し劣る。だが一般的な魔導師とは比べられないくらいは強い。

プロローグ

幾多もある世界の内の一つ。

その世界には数多の仮面の戦士達が一人の仮面の戦士と敵対していた。

何十もいる戦士達とたった一人の戦士。戦況は確実に一人の方が不利となっている。

戦士達は自分達の始まりの戦士と破壊者と呼ばれし戦士を前に並び立つ。

「貴様の悪事もここで終わりだ!」

始まりの戦士が一人に言う。一人の戦士は何も答えずに歩み出す。歩みは段々と早くなり、始まりの戦士へと一直線に走り出す。

始まりの戦士だけが一人の戦士に向けて走り出す。

二人は15 m程の距離で一斉に跳び上がる。

始まりの戦士は空中で一回転し、必殺のキックを。

一人の戦士は足からエネルギーを放出しながら右足でキックを。

「ライダー……キイック!」

「ハアアアアアアアアアア!!」

戦士のキックがぶつかり合う。

強大なエネルギー同士がぶつかり合い、中心で爆発を起こす。

その爆発は後ろで控えていた戦士達の所までも衝撃波が行き届き、急激に消えていく。

爆心地にいたのは始まりの戦士。

この瞬間、仮面の戦士達に悪と呼ばれた戦士が倒されたという事が分かった。

また一人の戦士は、数多の世界から消失した。

まるで最初からいなかったかのように、欠片も残さず。

「ハアまたこうなっちまったのか……」

何も無い黒い空間。まるで最初からいたかのようにその青年はいた。青年には白いスポットライトがかかっている。

そして青年がこの場所に来るのは既に五回目となっていた。

「いるんだろ。さっさと来いよ」

青年が何も無い所に声をかける。

「姿を現したいのは僕もなんだけどね、今回はいつもとは違うんだよね。君には最初に説明したよね？」

「ああ。『アレ』か。まさか本当に俺がやるとはな。確か、三人だったか？」

「うん。君はいつも単体だったからね。まあ、君は特殊だったから複数には参加したくないって言ってたけど、五回目ともなると流石にね？」

「分かった。それで、今回も選んでいいんだよな？」

「うん。でも君は与えたとしても使うかどうか分からないけどね。僕が与えた物から派生させていたから」

「それでも極僅かな数だがな。俺が作れたのは3個だけだ」

「まあそろそろ始まるから早く選びなよ。今回は五回目記念で二つ付けてあげるから」

「それはありがたいな。なら今回は——と——で頼む」

「分かったよ。なら早く行きたまえ。君以外の二人は既に座っているよ」

「ああ」

青年は上から降ってきた泥にその身を溶かされながら消えた。

シヤングリラを中心に3個の椅子がある。

椅子にはそれぞれモザイクの掛かった人と思わしきものが座っている。

『ようやく三人揃ったね。さて、改めて今回の事を説明しよう。君たち三人は若くして不幸な死に方をしてしまった人達だ。君達の心はとても優しい。そんな君達を殺しておくのは勿体ないと思った。そこで我々神はそういった君達を転生させることに決めた。君達には

一つずつ特典を与えて、『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生させる。君たちがそこでどう生きるかは自由だ。

さて、大体はおさらいできたね。今度は話し合いだ。転生者同士でこれからのことでも話し合いたまえ』

神はそれから声が聞こえなくなつた。

「まずは自己紹介からしよう。僕の名前は衛宮当麻だ。貰つた特典は fate の『無限の剣製』だ。よろしく頼む」

最初に切り出したのはモザイクに赤が混じつた少年の声だった。モザイクに紫が混じつた先程の青年は、『アホか』と思つている。幾ら心の優しいと言われた者達が集められたからと言って、自分の能力や本名を曝け出すのはどうかと思うが。

「見たこともない初対面の相手にすぐに特典と名前を晒すのはどうかと思うのだけど？」

モザイクに水色が混じつた少女と思われる凜とした声が響く。

「僕は君たちの事を信用しているから言つたんだよ。だから君たち2人も僕のことを信用してほしい」

「まあいいわ。私の名前は夢原美結よ。受け取つた特典は『魔法の才能』よ。よろしくね」

「よろしく夢原さん。それで、最後の君は？」

衛宮当麻は青年の方に話をふる。青年は面倒そうに溜息を吐いて大人しく喋る。

「黒崎幽雅。特典は『戦闘技術』」

青年——幽雅は怠そうな雰囲気を出しながら言う。何度も転生させられた幽雅の特典は一つではない。だが幽雅が今までに受け取つた『特典』の中に『戦闘技術』はない。

「よろしく幽雅。なら今後の目標を決めよう。僕は不幸な運命の人達を救いたい。だから僕は力を求めた」

突然どうでもいい話を話されて幽雅は、すぐにこの場を離れたかつた。別に衛宮当麻の目標を馬鹿にする訳では無い。ただ既に決められた運命を変えるのは並大抵の努力では不可能だ。幽雅はそれを理解しているからこそ、衛宮当麻の目標を否定するのだ。

「いい目標ね。私も賛成するわ」

「ありがとう夢原さん。幽雅はどうだい？」

当麻は幽雅に話をふる。本当に迷惑だ、と思いながらも幽雅はしっかりと答える。

「目標などどうでもいい。他人がどうなるうが、知ったことではないからな」

現実を知っているからこそ突き放す。信じられるのは自分のみ。下手な希望は持たない。それが、それこそが幽雅だった。

「そんなことを言っちゃダメだ！救えるのなら救わないと！」

「そうよ。空気を悪くするのはどうかと思うのだけれど？」

「知ったことか。俺は仲良しこよしはするつもりは無い。一足先に行かせてもらうぞ」

幽雅は意識を手放して転生の準備を始めた。幽雅の姿を覆っていたモザイクがしたから溶けるように消えていく。

そしてモザイクが消えると同時に幽雅の姿も消えていく。

後に残ったのは今後のことを話し合う二人だけだった。

新たな

毎回転生してすぐに見た事のあるソファの上。そこに幽雅は仰向けで寝ていた。

幽雅は目を覚ますとすぐに鏡が何処にあるかが分かっているような足取りで鏡のある部屋まで向かった。

「今回は6歳ってところか。微妙な所だな」

鏡に映った自分の姿を見てまあまああの評価を下す。

「今回は人間として生まれたようだな」

自分の体に力を込めてみるが体に変化はなく、人の形を保っている。幽雅は一回目と二回目に、人間ではなくロイミュードとオルフェノクとして転生したので、それ以降は転生してすぐに鏡を見るようにしている。

幽雅の容姿がロイミュードプロト・ゼロのチェイスに似ているのは、最初に転生したときプロト・ゼロとして転生したからだ。

それ以降変える必要も無いので、容姿は全てチェイスで通している。

次に幽雅は階段の下にある物置の扉を開く。そこにはとても広い、訓練所のような部屋があった。

部屋の中央に迷わず向かう。

中央には複数のアタッシュケースが置いてあり、柄はそれぞれ違う。

幽雅はその中の、流星のようなマークが刻まれたアタッシュケースを開いて中にあるものを取り出す。

「注文通りに出来てるな。それにコイツもある」

アタッシュケースからベルトのようなものを取り出して腰に巻く。同封されていた青いスイッチ《メテオスイッチ》を取り出し、ベルト

——メテオドライバーの左側にある穴に差し込む。

「性能実験だ」

《Meteor ready?》

メテオドライバーの上についてあるレバーを押すと気楽そうか機

会音が流れる。

「変身」

眩きとともにドライバーの右側についているレバーを叩く。上から青いレーザーのような光が青い球体を成して幽雅を包み込む。球体が弾け飛んで出てきたのは一人の仮面の戦士。

流星を模した青い顔に赤い複眼。黒のライダースーツに銀河のように線と星を繋いでいるボディ。そして右手首についている籠手のようなアイテム、メテオギャラクシー。

流星の戦士、仮面ライダーメテオ。

「ハッ！オラッ！フッ！」

メテオは暫くスーツに慣れるために仮想敵を用意して練習を行う。メテオの動きにはキレがあり、武術の達人でも舌を巻くほどの腕がある。

「コイツもやらせてもらおうぞ」

天井からコンクリートの壁が降りてくる。メテオはコンクリートの動きを確認して、メテオギャラクシーの三個ある内の一つのレバーを押す。そしてコンソールに人差し指を置く。

《MARS ready?》《OK MARS!》

メテオの手に火星をもした球体が現れる。メテオはその球体をコンクリートに叩き込み一撃で崩す。

「成程、文句ない性能だ。これなら俺が手を加えなくても大丈夫だろうな」

レバーを二回押して変身を解除する。幽雅はかなり動いたのに汗一つかいていな涼しい顔でメテオドライバーをアタッシュケースにしまい、五回目記念で受け取ったアタッシュケースを開いた。

ケースにはベルトと携帯と剣が入っており、見る人知る人によってはとても恐ろしい代物だった。

「コイツは切り札だ。今はまだ大人しくしててもらおうぞ」

使う日が来ないことを祈らんとばかりに、幽雅はアタッシュケースを閉めた。

私立聖祥大学付属小学校。

幽雅は今日からここに入学することになった。

幽雅は『リリカルなのは』の原作を知らない、もしくは忘れていたため、これからどうなるかが分からない。ただ転生させられた以上、関わらなくてはいけなくなってくる。

面倒事に積極的に関わりたくない、が振りかぶる火の粉は払う位は別にいい、と思っている。

入学式が終わり、指定の教室に向かう。窓側の一番後ろの席に座り、前のめりに寝る。

担任の教師が来たので起き上がり、周りを少し見渡してみる。カラフルだ。単純にそう思えてくる。茶髪に金髪に紫髪に赤髪とまるで虹のようだと思い、担任の方を見る。

ふと小さい気配を感じて下を見てみると、そこには黒いスポーツカーのミニカーがあった。

幽雅はミニカーを拾い上げ、誰にも見られないように声をかける。「何をしている?」

「いやあ、少し君に伝え忘れたことがあってね。それを伝えるために少し借りさせてもらったんだ」

「借りるのは別に構わないが、今度からはメテオスイッチからにしてくれ。シフトカーを使うのは非常時だけでいい」

「了解。それじゃ手短かに伝えようか。その世界では皆普通に空を飛んで戦闘しているんだよね。だから君の作ったベルトやガンナーにも空を飛べる機能を付けたから。外見に変わりはないよ。それに君にリンカーコアという物を付けた。魔力を発するらしいよそれ。君の魔力値はSS。他の転生者と同じだよ」

「了解。覚えた」

「うん。じゃあね」

声の主・・・神はそれ以降声を発さず、黒いシフトカーも帰っていった。

丁度よく自己紹介の番が来たので席を立つ。幽雅は他人の視線の的になるのが嫌なので早めに終わらせることにした。

「黒崎幽雅です。よろしくお願ひします」

短く、簡潔に。誰にも目立たない程度の軽い自己紹介に反応した人物達がいた。赤髪と茶髪の男女。

幽雅はこの2人が転生者だと悟り、すぐに席に座る。

それから40分後、小学校生活一日目は終了した。

筈だったのだが・・・

「ちよつといいかな？少し話があるんだけど？」

赤髪と茶髪が帰る前に話しかけてきた。赤髪の後ろにはツインテールの茶髪がいる。

「何？俺は早く帰りたいんだが」

「すぐに終わるから早く来て」

茶髪——夢原美結が腕を引っ張り無理矢理幽雅を無人の教室へと連れて行く。

「久しぶりだね。僕達と同じ転生者君。改めて、衛宮当麻だ」

「どうでもいい話はやめろ。それで、用件はなんだ？」

「僕達と共に戦ってくれ」

真面目な、真摯な目で訴えかけてくる。後ろにいる夢原までもがそのような目で幽雅を見つめる。幽雅はこの二人の目が綺麗に見えた。だからこそ、関わりたくない、『改めて』認識した。

「断る。前にも言ったが、俺は他人がどうなろうが知ったことではない。厄介事に自分から首を突っ込んで、無駄をするのだけはゴメンだ」

「君は誰かを救いたいとは思わないのか!？」

当麻が幽雅の肩を掴んでくる。その手には精一杯の力が込められており、幽雅を逃がす気はなかった。

「いい加減にしろよ。みんなが皆、お前らと同じ思想を持っている訳では無い。それに、お前が助ける奴らからは助けを請われたのか？運

命を変えてくれとお願いしたか？懇願したか？してないだろ。俺達
が関わらなくても勝手に『ハッピーエンド』になるだろ？俺達が関
わったせいで『バッドエンド』になるかもしれないだろ？つまりはそ
ういうことだよ……」

幽雅は当麻の腕を振り払い、ドアを乱暴に開けて教室から出てい
く。

当麻はそんな幽雅を見て唇を噛み締めていた。

拾い物

転生してから二年がたった。幽雅は今小学3年生。

これまでの小学校生活は退屈の一言だった。既に何度も大学生活を送ってきている幽雅にとって、高校までの勉強は大抵出来る。

何も無い、平穏な学校生活。

幽雅は毎回の事だが、前の世界では特に酷い人生だった。

ダークライダー達のトップをして、サブライダーや主役ライダー達とのスーパヒーロー大戦(仮)で仮面ライダー一号に蹴り殺されたりと碌なものではない。

二度目は灰にされている。

前は大学の途中辺りからダークライダーとして戦ってきたので、小学校に通っている間は余裕を持って生活できる。

・・・・・・と思っていた。

これまでに五回もの死を遂げてきた幽雅にとって今回が初めての事態。

目の前に金髪のレオタードを着た美少女が倒れている。

放っておくわけにもいかないので、人目がないことを確認して、少女を背負い、家まで連れていく。

伊達に体を鍛えてないので数分で家に着くことが出来た。

少女をベッドに寝かせて布団を被せる。幽雅は少女が目覚めるまで、ベッドの近くに椅子を持っていき本を読み始める。

「知らない・・・天井だ」

数十分たっただろうか。少女が目覚めて声を発した。

「起きたか。それで、体調はどうだ？」

「あなたは？」

幽雅は本を閉じて、近くにあった机に置く。

「黒崎幽雅だ。この家は俺しか住んでいないから安心してくれ」

「私はフェイト・テスタロッサ。体は大丈夫だよ」

フェイトは上半身を起こして壁にもたれかかる。明らかに体調が

悪そうだった。

「おい、大丈夫じゃないだろ。ほれ、少しこい」

「えっ！ちよっ……！！」

幽雅は突然ベッドに身を乗り出し、フェイトの額に掌をつける。その行動のせいでフェイトの顔は真っ赤に染まる。

「少し熱いな……。お前今日はうちに泊まってけ」

「えっ？いいよ。迷惑かけちゃうだろうし」

「俺としてはこんな状態のお前を一人で帰すのは心配なんだがな……」
フェイトは幽雅の顔が近くにあるせいで顔が熱くなり真っ赤となっている。それを幽雅は熱がある、と勘違いしている。

その時、グ~~~~という音が、フェイトのお腹から聞こえてくる。

フェイトはさらに顔を真っ赤にして俯く。

「~~~~~!!」

「はあ。ちよつと待ってろ、今なんか作ってきてやるから」

幽雅はため息をついてキッチンへ向かう。

フェイトは幽雅のことを見届けて部屋を見渡す。無駄な装飾がないシンプルな部屋。

強いて言うならば、壁一面本棚になっており、本棚には沢山のジャンルの本がギッシリと詰まっている。
ドンツドンツ。

窓の壁が叩かれたので、フェイトは開けてみる。

開けた窓からはフェイトの使い魔であるアルフが飛び込んできた。

「大丈夫かい!? 帰ってこないから心配してたんだよ!？」

「ご、ごめんねアルフ」

アルフの剣幕に少し怯えながらフェイトは謝る。

「なんか増えてないか？」

両手をお盆で塞がった幽雅が入って来た。

「ほれ、作ってきたぞ」

「えっ……待っ……ッ！」

アルフを無視して椅子に座り、お盆を机に乗せる。

器を手にとってスプーンでフェイトの口の中に勝手に入れていく。

食べているフェイトの顔は幸せに歪んでおり、頬を紅潮させていた。

「それで、アンタ誰？」

「勝手に入って悪かったさね。アルフってんだ。フェイトの使い魔をしているな」

「使い魔……魔法？」

魔法と考えて地下に置いてある指輪とベルトを思い浮かべる。

「幽雅は魔法を知っているの？」

「さあね」

フェイトに器とスプーンを渡して、幽雅は窓を閉める。

「迎えが来たならイイじゃん。それ食べたらもう帰りかよ。時間も時間だし」

それだけ言うと幽雅は部屋を出ていく。幽雅は地下室に行き、ケースからドライバーと指輪を取り出す。

「さて、仕事の時間だ」

《Cerberus NOW》

ドライバーに指輪をかざして、プラモンスターのブラックケルベロスを召喚して、嵌めていた指輪を付ける。

「あの二人のことをバレないように追って」

ワンワン、と犬のように叫びながらブラックケルベロスは走り去っていった。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……。ある意味両方とも面倒だが……。それから30分後、フェイトとアルフは家に帰った。

それから少したち、ブラックケルベロスからの報告を聞いてベッドで意識を落とした。

感謝の言葉

フェイトが家に来てから数週間後。

幽雅は最近になってからよく感じる魔力が鬱陶しかった。本を読んでいる時や寝ている時などは本当に面倒だった。使い魔を飛ばしたり、自分で見に行ったりすると変な怪物と高町なのはと衛宮当麻、夢原美結が戦っていたりする。

当麻は幽雅の知っている衛宮士郎よりも格段に強かった。剣の才能があり、魔力もある。まさに完成系となっている。

美結に関しても、魔法の一つ一つが砲弾並の威力があり、尚且つそれを連射する。更に少しだが近接戦闘もこなしている。

この2人は幽雅にとっては予想以上の実力があつた。幽雅はこの2人の評価を改めて、自分に一番デメリットが少なくなるか、計算し直した。

図書館

ここは幽雅がよく来る場所だ。幽雅がここですることは二つ。自分の知っている歴史と、この世界の歴史との違いを確かめる。

かつて幽雅が転生した世界の一つに、全く歴史が違う世界があつた。

例えば、本能寺の変で織田信長が自ら腹を切って本能寺で焼け死ぬのが本来の歴史だが、ある世界では織田信長は死なずに、逆に襲撃してきた方が全滅したという歴史をを残していた。

つまり歴史の勉強がしたいだけ。神話も込みで。

二つ目は過去の事件。過去、幽雅がこの世界に来るまでに起きた不可解な事件。特に突然連続で事件が起こったにも関わらず、少したつたらすぐに何の証拠も残さず消えてしまった事件。この世界に幽雅以外、本来のライダーがいるかどうかの検証。ありとあらゆる新聞や都市伝説等の書物を片っ端から読み漁っていた。

幽雅はとりあえず読み終わった本を返そうと、元の本棚へと向かう。静かで心地がいい。

本棚と本棚との間に、背伸びしている同年代の女の子を見つけた。どうやら本を返すのに手こずっているらしい。

女の子はミニスカートで背伸びしているため、いつ見えてもおかしくない。さらにその場所には幽雅が返そうと思っっている本棚もあった。

「ほれ、貸せよ」

「えっ?」

見ていられなくなった幽雅は女の子から本をとって自ら本棚へに入れる。それと本命で自分の本を棚へと戻す。

「じゃ、俺はこれで」

それだけ言って幽雅は立ち去ろうとする。何か嫌な予感がするのだ。この少女に関わると、何か自分にとって不都合なことが起きるかもしれないと、幽雅の感が言っていた。

だが現実はそう甘くはない。

「待って」

言葉と共に幽雅は腕を引っ張られた感覚がしたので振り返る。予想通り、少女が幽雅の裾を引っ張っていた。

「何?」

「お礼言ってなかったから。———ありがとうございます」

ありがとう———この言葉は幽雅の胸に突き刺さった。久しく聞いていなかった言葉。自分の口からも発することは無かった言葉。

目の前の少女には当たり前前の言葉かもしれない。

だが、幽雅は今にも涙腺が崩壊しそうな程、心地の良い言葉に聞かされた。

「あ、ああ。黒崎だ。黒崎幽雅」

「うちの名前は八神はやてや。よろしく、幽雅」

それからは何でもない話をして別れた。その時の幽雅の心は自分でも清々しいほどの上機嫌だった。

腕直し

学校の宿題やトレーニングをいつも通りにこなしていると、この日はいつも以上に不快な魔力を感じた。

幽雅はそろそろ実戦の雰囲気を取り戻したいので、戦闘に介入することにした。

「おーやってるやってる」

ビルとビルを跳び越え、轟音が鳴っている原因を見る。

そこには狼とフェレット、そしてフェイトに高町なのは、美結と当麻もいた。

「さて、こっちもやりますか」

地下から持ってきたアタッシュケースの中身の内の一つ、黒い小刀の付いた真ん中に窪みのあるバツクル、《戦極ドライバー》を腰に付ける。ポケットから赤色の果実の付いた錠前をとり、錠前を開く。

《ブラッドオレンジ》

「変身」

《LOCK ON》

錠前——ブラッドオレンジロックシードを窪みに嵌め込み、錠前を閉じる。するとベルトからギター音が鳴る。

黄色い小刀を下げる。

《ソイヤッ！》

《ブラッドオレンジアームズ 邪の道・オン・ステージ》

幽雅の体を青いライダースーツが多い、身長が伸びる。上にクラックが出現し、中からブラッドオレンジが出てくる。幽雅にブラッドオレンジが被さり、ブラッドオレンジが展開される。

現れたのはかつて天下を取ろうとした武神ライダーの一人。

———アーマードライダー武神鎧武。

「さて、行くか」

アームズウエポンの大橙丸を右手に持って、戦闘の中心へと飛翔し

ていく。

ビルに囲まれた市街地。そこでは四人の男女と、二匹の獣がいた。彼等は一匹の獣と少女、一匹の獣と三人の男女で敵対している。だが今戦っているのは二人のみ。

フェイト・テスタロッサと高町なのはだけが戦っている。

「凄いわね、なのは。もうあんなに強くなってる」

男女のうちの一人、美結が独り言のように言葉を零す。美結は転生特典によつて魔導師として強くなったが、なのはは違う。元からあつた才能だけで強くなったのだから。

「そうだな。本当にすごいよ。おっと、僕達は僕達のやるべき事をやらないとね」

「そうよね」

当麻と美結は各々の武器やデバイスの準備をする。これから二人がするのは、撤退するフェイトとアルフを捕まえて、黒幕のプレシア・テスタロッサの所まで連れて行かせること。

二人が話している間にも、戦闘は終わりへと近づいていく。フェイトのバルディッシュとなのはのレイジングハートがジュエルシードを挟む。突如、ジュエルシードから閃光が迸り、両者のデバイスを破損させる。

ジュエルシードは健在。

フェイトは諦めずに素手で封印しようと、ジュエルシードを触ろうとする。だがその前に『何か』が高速で移動してジュエルシードを持ち去った。

「誰だ!」

「敵!」

当麻と美結は備えていた武器を『何か』へと向ける。

その何かの後ろ姿は鎧武者だった。

「まさかあれは!」

「知っているの?衛宮君」

当麻が驚いたような声を上げる。

「あれは・・・仮面ライダー武神鎧武！」

「仮面ライダーってあの子供向けの？」

「ああ。間違いない。あのフルーツの鎧武者は間違いなく仮面ライダー鎧武だ」

ゴクリ、と息を呑む当麻。仮面ライダーが飛行する時は何かのアイテム等が必要なライダーが多い。だがあの仮面ライダーは何もなく、高速で飛行していた。

『っ！』

鎧武が振り向く。全員警戒態勢に入る。

「これが・・・ジュエルシールドか」

鎧武が突如声を発する。その手には先程まで空中にあったはずの、ジュエルシールドが握られていた。

「こんなくならない石ころの為に、俺の領域を荒らすか」

「それを・・・渡してください・・・！」

フェイトがたどたどしい足取りで鎧武へと近づく。鎧武はそんなフェイトを無機質な複眼で見つめる。

「フェイト・・・アルフと共にこれを持っていけ」

どうして名前を、と驚くがそれを言っている余裕はないので、飛び出してきたアルフと共に、鎧武からジュエルシールドと、紫色のミニカーの様なものを受け取る。

「ありがとうございます・・・ございます」

「礼はいい。さっさと行け」

鎧武は当麻達の方を向く。その存在感は伊達ではなく、今にも平伏してしまいそうなほど強烈だった。

「さて、誰が俺の相手になる？」

手に持った大橙丸を肩に担ぎながら少しづつ歩み寄っていく。なのはとフェレット、美結は少しづつ下がろうとするが、足がうまく動かない。

「くっ！分かった、僕が相手だ！」

当麻が両手に白黒の双剣を構えて前に出る。

「いいぜ。来いよ」

「ハアアアアアアアアアア!!」

一気に駆け出す当麻。鎧武は余裕そうに歩いている。

「ハッ! タアッ!」

「ほう、なかなか」

当麻の双剣を大橙丸でいとも容易く弾いていく。当麻の全力の剣技が鎧武には通用していない。

「チィっ!」

「あめえよ」

当麻の右からの突きを蹴りでいなし、左からの斬撃を腰につけた無双セイバーをとり、剣を砕く。大橙丸を首目掛けて振るう。それを当麻は上半身をそらして回避する。無双セイバーによる更なる攻撃を右手に持った剣で受け止めるが勢いを殺せずに折られる。

「ふん!」

「グアッ!」

武器を失った当麻の顔に回し蹴りを叩き込む。蹴りは当麻の側頭部に直撃して当麻を地面に叩きつける。

「ぐうつ、まだ・・・やれるぞ!」

「へえ。なら今度はこれだ」

《《パイーン》》

鎧武は新たなロックシードを取り出して解錠する。そして戦極ドライバーに取り付ける。

《《LOCK ON》》

《《ソイヤッ!　　パイーンアームズ》》

《《粉碎・デストロイ》》

「姿が変わった!?!」

鎧武がパイーンアームズへと変わったことに美結が声を上げる。鎧武はその声を無視してアームズウエポンの《《パイーンアイアン》》を当麻へと投げ付ける。

当麻は身をよじってパイーンアイアンを回避して両手に先程破壊されたのと同じ双剣を作り出す。

「喰らえ!」

脚力を強化してジグザグに移動し、鎧武の懐に入り込む。当麻は渾身の力を込めて右手に持った剣で鎧武を切り裂く。

——ギン。

あつけない音と共に、当麻の剣が弾かれる。

当麻が呆然としていると、鎧武はパイニアアイアンを当麻の腹部へと叩きつける。

ドガン！

当麻の腹部に激痛が走ると、当麻は吹き飛ばされる。先ほどの蹴りよりも遥かに強力な攻撃。

「当麻！」

「当麻君！」

美結となのはが吹き飛ばされた当麻に駆け寄る。鎧武は非殺傷設定にしていたので、当麻本人に目立った外傷は見られない。

「ふん。所詮はこの程度だ。成長すれば少しは期待していいだろうな」

鎧武はパイニアアイアンをしまい、パイニアームズからブラッドオレインジームズへと姿を変える。

「またな。運命に抗う愚か者」

鎧武はそれだけ言うとすぐに飛んで帰った。

薄まっていく意識の中で鎧武の声を聞いた当麻は悔しそうに唇を噛み締めた。

裏方

市街地での戦闘から翌日。

いつも学校で元気になっている当麻は、この日は少しいつもとは違った。授業中もどこか上の空。友達と話している時も、いつもの明るさは出ていなかった。

当麻自身このことを理解している。原因もだ。

市街地での戦闘の時に現れた仮面ライダー武神鎧武。

理不尽なまでの圧倒的な強さ。腕に少しは自信のある当麻をいとも簡単にいなし、隙をついた攻撃。

自信の投影で作った干将・莫耶を受け止めもせず、ただ立っているだけで破壊してみせた防御力。

仮面ライダー全員が保有する必殺技を使わずに自分を倒した強者。

そして薄れる意識の中で聞いた、『運命に抗う愚か者』という声。

当麻はこの世界に転生することになってから感じたことは親への申し訳なさだ。今まで育ててくれた親に対して何一つ恩返しができなかった悔しさ、悲しさ。

だから当麻はこの世界で悲しい運命や、誰かを悲しませる要因をなくしようと、最大限努力してきた。

5歳の頃に公園にいた高町なのはの親、高町士郎は助けられなかった。

特典として貰った《無限の剣製》を駆使してもどうしようもなかった。だから今度こそは誰かを助けようと思った。

そして公園で泣いているのはを見つけて家族関係の問題を解決へと手伝ってあげた。

その次の日になのはに会い、感謝された。

当麻はそのことをとても嬉しく思えた。だから今度は全員を救おう。死ぬ運命にある人も、何かを失う人も、全て手遅れになる前に全て救おうと。

今回の戦闘も、撤退していくフェイトを美結と共に捕まえて、黒幕であるプレシア・テスタロッサのいる『時の庭園』まで連れて行って

もらい、ジユエルシードを集めるのをやめてもらうように説得するつもりだった。

そして鎧武が現れた時、無理矢理戦闘になったがどうにでもなる、と思った。自分が転生してから学んだ武器の取り扱い、投影の練度、武器の使い手の憑依経験。

その全てをやるだけのことをしてきた。

だが鎧武相手には何も通用しなかった。

投影した剣は鎧に阻まれ、自分の技術は通用しない。

どうすればいいかわからなかった。

自分の今の人生を全て使って呆気なく負けた事実。

恐らく原作に関わってくるだろう武神鎧武。

次は勝てるだろうかという焦り、焦燥、敗北感、恐怖。これらの感情が当麻の心を支配していく。

その日当麻は、学校を早退した。

「衛宮当麻、伸び代はあるな」

家に帰り変身を解いた幽雅は当麻に当てられた剣の部分を撫でていた。幽雅の体には少し痺れが残っている。

当麻が当てた渾身の一撃は鎧武と幽雅に外傷面でのダメージは与えなかった。

だが斬られた部分からは痺れが残っている。

「この程度ならどうにでもなるか」

軽く肩を回して確認する。

「また一仕事か」

戦極ドライバーをアタッシユケースにしまい、別のアタッシユケースからベルトとブレスレットを取り出す。

ベルトを腰につけ、イグニツシオンキーを回す。

《Start your engine》

どこかから飛んできたシフトカー、シフトネクストをブレスに装填してレバーと化したシフトネクストを押す。

《DRIVE! type NEXT!》

ベルトから発音のいい英語が聞こえてくる。

幽雅の周りにタイヤが飛び回り、幽雅の体を黒い青の線が入ったボディースーツが覆っていく。

ドライブの体に纏掛りで黄色いタイヤが付けられる。

—— 未来から来た追跡者、仮面ライダーダークドライブ。

「頼むぞ、デイメンションキャブ」

飛んできたデイメンションキャブがクラックションを鳴らす。すると、いつの間にかドライブの姿はなくなっていた。

「フェイトはちゃんと持ってくれていたみたいだな」

くぐもった声が響く。ドライブが移動した場所は時の庭園のプレシアの拷問部屋となっている部屋。

その部屋にはプレシア・テストロッサと傷だらけのフェイト・テストロッサがいた。

「さつきぶりだな。俺の名はダークドライブだ」

「自己紹介はいいわ。貴方はどこから来たの？」

プレシアがドライブの前に立ち、体から電撃をほどばしらせる。プレシアの魔力は雷と変換され、ドライブへと襲い掛かる。

「頼むぞ、お前達」

ドライブが呟くと、いくつもの道路が現れる。道路の上にはシフトカーが走り、プレシアの雷を弾いていく。

「貴様の目的はなんだ？」

ドライブがブレイドガンナーをプレシアに向ける。プレシアは自分が恐怖で足が震えていることに気づかない。

「早めに答えろよ。生憎だが、俺の気はそこまで長くはないぞ」

ブレイドガンナーをガンモードにして地面を二回撃つ。

「私の目的は、娘であるアリシアを蘇らせることよー！」

「そうか」

プレシアの目的を聞いてドライブは落胆した様な声を上げる。ド

ライブはもう興味が失せたのか、ブレイドガンナーを下ろしている。
「貴様の『悪』に興味を持ったが、もう失せた。貴様の程度は実にくだらない」

「ッ！」

自分の目的をくだらない、と言われてプレシアは身を乗り出そうとする。だがその行動はダークドライブが投げたものをキャッチする事で止まった。

「どうしようもない時はそれを頼れ。人を超えた力が手に入る」

プレシアに投げたそれは青いメモリのような形をしていた。それをプレシアはマジマジと見つめる。

「運命に抗うことが出来るか・・・見せてもらおうぞ」

《ZONE》

ドライブは色が違う、同じようなメモリについているスイッチを押すと、その姿は消えた。

開発

ガイアメモリ

これがドライブ——幽雅がロシアに渡し、自分で使用した物だ。ガイアメモリにはその名の通り地球の記憶が収められている。birdなら鳥の記憶。NASCARなら高速移動と飛行の記憶を。

幽雅が瞬間移動のように移動した時に使ったのは《ゾーンメモリ》。市街地での戦闘の時にフェイトに渡しておいたシフトカー、デイメンションキャブで場所をリークしてゾーンメモリの能力でとぶ。完全犯罪ここに極まれり。

幽雅は気付いていなかったが、デイメンションキャブが提示した座標は幽雅の世界、第97管理外世界にはない。ならなぜゾーンメモリで飛ぶことが出来たのか。その理由は幽雅さえ知らない《神様からの贈り物》が原因である。

《神様からの贈り物》とはその名の通り、幽雅を転生させた神からのおまけである。本人が知らない内にどこか強化された特典の一部のことである。

そのオマケが幽雅の常備しているゾーンメモリに、次元世界すらも座標さえ知っていれば超えられるというものだ。

「ゲネシスドライバー……。やはり自分で作ったものの調整時間が掛かるな」

時の庭園から帰ってきた幽雅は自宅の地下室にある研究室にもっていた。

幽雅の視線の先には数字の羅列が書かれたモニター、そしてレモンが付いているエナジーロックシードを付けてある、赤いドライバー、ゲネシスドライバーが計測機器に繋がれて置かれている。

幽雅は特典で得たベルトから、更に自分でベルトを作っている。だがそのベルトは原典のベルトよりも少し性能がいいだけ。今まで作ったベルトの中で幽雅が納得した性能を出せたのは一つだけ。

その一つだけが、神から特典で与えられたベルトよりも、確実に性

能が上回っている。

目の前のゲネシスドライバーは幽雅を納得させる程の性能が出せなかった。

「どこか足りないところ・・・出力は安定している。やはり安全装置が邪魔になっっているのか？だが未完成な状態で外すと・・・」

置いてあるキーボードを叩きながら愚痴る。

「やはりデータが足りない。ゲネシスドライバーで安全装置を外しながら戦わなければ、このロックシードを使うことは出来ない」

幽雅は壁に掛けてある、赤い刺々しいロックシードを手に取る。このロックシードはある生命体に作らせた、希少な物だ。

「衛宮当麻・・・アレは逸材だ。少々手を出して、夢原と共に強くなつてもらおうかあ。ゲネシスドライバーと戦えるレベルには」

幽雅の放課後の行き場所となっている図書館。

ゲネシスドライバーの一応の調整を終えた幽雅は行く宛もなかったのて来ていた。

だが一人ではない。

幽雅の席の向かいに、久しぶりに会う八神はやてが座っている。偶然本を探している時に遭遇したのがはやてだ。

「ほんま久しぶりやね、幽雅君」

「そうだな」

嬉しそうに問いかけてくるはやてを素っ気なく流す幽雅。

「最近は何調子どうなん？」

「いつも通りだな。しいていえば少し面倒事が増えただけだ」
本当に面倒事がな、と後ろにつけて、目の前のコーヒーが入っている紙コップを煽る。黒い液体が幽雅の喉を潤していく。

「そういうお前はどうかなの？」

飲み終わった紙コップを置いて、机の木目を見ながら問う。

「うーん・・・まああんまり変わらんかな」

逆にはやては上を見ながら気軽そうに答える。

「幽雅君は家族と仲良いの？」

「・・・俺に家族はいない。あるのは両親が残した遺産だけだ」

本当は親の顔なんて既に覚えてすらいらない幽雅。

既にロイミュードとして存在していたり、初めからオルフェノクとして生を受けた時などのショックで一部の記憶が欠損している。

「そっか・・・。私と同じやな」

「同じ?」

「私も事故で家族なくしたんだ」

「・・・悪い」

雰囲気が悪くなつて目を横に逸らす。はやてはあははと言いながら苦笑する。

「・・・俺の面倒事が終わったら今度お前ん家行くから住所教えろ」

「え?」

幽雅の突然な物言いに疑問の声を上げるはやて。幽雅は少し恥ずかしかったのか、スマホのメモアプリを起動してはやてに渡して、少し顔を赤くしている。

スマホを受け取り、自分の住所を打ち込むはやて。

打ち終わるとスマホを幽雅に返して立ち上がる。

「ほなまたな」

はやてが幽雅にウインクしながら出口へと走っていく。

その後、幽雅はもう2杯コーヒーを飲んで図書館を出ていった。

死神

図書館に行った日からまた時は経ち、幽雅は海の見える海岸付近で黄昏ていた。

幽雅がシフトカーを使って、ある二人の話を盗み聞きしている時に、次のジュエルシールドが発動する場所が、この辺りだと聞いたのだ。ゲネシスドライバー完成のために強者との戦闘データが欲しい幽雅は学校が終わってから家に一度帰り、すぐに盗み聞きした時に聞いた場所へと身を隠した。

幸運な事にまだ誰にも見られていない。

タブレット菓子を取り出して口に投げ入れる。噛み砕いて水で流すだけで当面の空腹は免れる位に腹を膨らませる。

腰にはバレないように戦極ドライバーを付けてある。戦極ドライバーにはひまわりの模されたロックシールドを付けている。

ガサガサツという音がしたので、ベルトを隠しながら起き上がり音のした方を見つめる。

見つめた先には綺麗なツイントールの金髪が片方だけ見えていた。

「フェイトか？」

手を背中に回していつでもブレイクガンナーを抜けるようにしておく。

視線の先から出てきたのはやはりフェイトだった。

「えーっと・・・久しぶりだね、幽雅」

彼女——フェイト・テスタロッサは思い込みの一方的な再会を果たした。

草の生い茂っている場所に、幽雅とフェイトは隣合わせで座っている。フェイトは俯いているが、幽雅は何と感じていないような目で、海を見ている。

この状態になってからはや三分、未だにこの二人には会話がなない。ただそこにいるだけの空虚な時間が続く中、幽雅が話を切り出す。

「お前は、魔導師なんだってな」

「……うん。あの子達から聞いたの?」

案外驚かずにフェイトは答えた。前に見た男の魔導師のバリアジャケットを纏っていない姿が幽雅の服装と同じだったから、そこから聞いたのかもしれない、と考えたからだ。

「さあな。少なくとも俺はあいつらとあまり話さないし、仲良くはない。精々仲がいいやつは、お前と読書娘だけだよ」

「読書娘?」

ただの本好きだよ、と苦笑しながら幽雅は答える。フェイトは心が好調してきた。自分でも理由は分からない。幽雅が先程の言葉と言った瞬間から、顔が熱くなり、心臓がバクバクと動いていく。だがそれと同時に、胸が苦しくなった。幽雅が読書娘、と言った瞬間に自分の心に黒い霧のような物が掛かってきた。

「それで、その傷はなに?」

幽雅がフェイトの服の隙間から見える傷を指指す。

この傷はフェイトの母、プレシアが付けた傷。プレシアからの命令であるジュエルシードの回収が思うように進んでいない罰。

〈フェイト!ジュエルシード、見つけたよ!〉

自分の使い魔であるアルフからの突然の念話。ジュエルシードはおそらく既に発動しているだろう。だが今は目の前にいる幽雅をどうにかしなければならぬ。

「えーっと……」

「ハア。いいよ。答えなくても。その代わりに今度また俺の家に来い。傷の治療位はしてやる。用事ができたんだろ?早く行けよ」

「その……ありがとう」

幽雅の気遣いに軽く言葉を返して、すぐに人目のないところまで向かう。

残された幽雅は戦極ドライバーを外して、ブレイクガンナーを手取る。

「ごめんな…….…….フェイト。」

変身」

《Break up》

ブレイクガンナーのマズルを押す。声の低い機械音声と共に、幽雅の周りをバイクのジャンクパーツが回転してまわり付いていく。

既に幽雅の姿はなく、そこにいるのは異形。

紫と銀、黒のボディでジャンクパーツの寄せ集めのようなアーマー
スーツ、右目はパーツで隠れており、残った左目は怪しいオレンジ色
に輝いている。

——ロイミュードの死神、魔進チェイサー。

チェイサーはどこからかやってきたライドチェイサーに乗って、魔
力のある方へと走っていった。

数分前

「アレは、ジュエルシード!」

海鳴臨海公園。ここになのは、当麻、美結は来ていた。

ジュエルシードの発動場所がたまたま近くだったので、フェイトよ
りも早く来る事が出来た。

「俺が援護するから、二人はそのうちに封印を!」

赤い弓兵の服を纏った当麻が弓を作り出して指示する。なのはと
美結はお互いのデバイスを構える。

「行くよ! レイジングハート!」

《All right》

「行くわよ! サファイア!」

《はい、マスター》

ジュエルシード、木の怪物は奇声をあげながら腕のような根を振り
回す。美結は得意の高機動で腕を掻い潜っていく。なのはは遠距離
からの砲撃で牽制する。

「デイバイン——シューター!」

「くらえ!」

なのはがデバイスのレイジングハートを振ると、周りにピンク色

の4個のスファイアが形成される。形成されたスファイアは木の怪物目掛けて、ピンク色の軌跡を残しながらとんでいく。

木の怪物は腕を振るってスファイアを叩き落とそうとするが少し遅れて放たれた当麻の矢が腕に当たり、軌道がズレる。スファイアは木の怪物に当たり、煙を巻き起こして消滅する。

「こつちもやるわよ！」

《ソードモード》

美結のデバイス、サファイアが杖から魔力で構成された剣へと姿が変わる。

これが美結のデバイス、サファイアのシステム。マルチウエポンシステム。

美結は手に持った剣で木の怪物の腕を一本難なく切り落とす。サファイアは平行世界の狭間から魔力を持ってきて、所有者に無限の魔力を与えることが出来る。更に美結自身の魔力を流し込む事で、流した分だけ強力な攻撃ができるようになる。

「まだまだ！」

美結は返す刀で胴体を切り裂く。木の怪物の体に横一文字に傷が入る。

「美結！下がれ！」

当麻の声で咄嗟に後ろに下がる美結。その直後、頭上から魔力弾による砲撃が飛んできた。上を見るとなのはがレイジングハートを木の怪物に向けて構えていた。

「これで……！」

当麻が剣を投影すると、上から数多の魔力弾が飛来してくる。魔力弾は木の怪物に命中して、苦悶の声を挙げさせる。

魔力弾が飛来してきた方を見ると、そこにはフェイトがいた。当麻と美結がフェレットのユーノの方を見ると、フェイトの使い魔であるアルフに前を塞がれている。

呆然としている三人をよそに、フェイトは追撃を仕掛ける。自らのデバイス、バルディッシュを鎌の状態にする。

「いくよバルディッシュ。アークセイバー」

《Arc saber》

「レイジングハート！」

《shooting mode》

なのはも即座にレイジングハートの形態を変えて、木の怪物へと向かおうとする。当麻も二人に当たらないように、弓を構える。美結は魔力弾を放つ用意をしている。

そんな彼らの耳に、この場では相応しくない轟音が聞こえた。

「派手にやりすぎだな」

幽雅——魔進チェイサーは結界付近で一度バイクを止める。普通の人から見れば変わった様子はないが、魔力持ちのチェイサーから見れば、不自然に色が違う空間がある。

「上にもなにかいるな」

幽雅は見られたような感覚があったので上を見上げる。そこにはやはり何も変わらない橙色の空があった。

「俺も混ぜてもらおうぞ」

チェイサーはバイクを走らせて結界内部へと突入する。結界内に入ったチェイサーの目には4人の少年少女と、奥には木の怪物が見える。

木の怪物以外は突然現れたチェイサーを見て呆然としている。

「ぼんやりしているなよ」

《gun》

ブレイクガンナーのマズルを押してガンモードへと切り替える。そのままブレイクガンナーを奥にいる木の怪物へと向けて撃つ。

なのもフェイトも美結も驚いている。なにせメリケンサックが突然、弾丸を射出したのだから。

チェイサーの射撃は木の怪物へと正確に当たる。

木の怪物は地面から根を引っ張り出し、盾のように展開する。

「おい、弓兵。あの根をどうにかしろ」

チェイサーがブレイクガンナーを構えながら当麻に目で訴えかける。確かに当麻にはあの根をどうにかする手段がある。

「わかった・・・！」

「当麻君?！」

美結が当麻のことを止めようとする。当然だ。突然現れた異形の人の命令をそのまま実行するのだから。

「I am the born my sword」

当麻の手に一本の剣が現れる。その剣を当麻は持っていた黒弓に番えて、更に詠唱する。

「我が骨子はねじれくるう！」

弓につがえられた剣が捻れる。その剣はある英雄が使用していたものを、弓で撃てるように調整されたもの。

「カラドボルグIIII！」

当麻が剣を放つ。その剣は地面を抉り、木の怪物へと一直線に進んでいく。木の怪物は根にあたる直前にバリアを張る。だがその程度で英雄達が使ってきた武具の模造品は止まらない。バリアを貫通して根に突き刺さる。当麻の攻撃はまだ止まらない。

「《壊れた幻想》」

当麻が更に詠唱すると、矢に込められた魔力が爆発して、根の盾に大穴を開ける。

それを見届けたチェイサーは、どこからかやってきた、銀色のバイラルコアをブレイクガンナーに装填する。

《Tune chaser spider》

チェイサーの右腕、ブレイクガンナーを中心に銀色の盾が合体したような無骨な弓、ウイングスナイパーが付けられる。

チェイサーは更にマズルを押し込む。

《execution full Break bat》

ウイングスナイパーが背中に繋がり、コウモリのような羽となる。チェイサーは飛び上がり、穴の奥にいる木の怪物へと飛んでいく。

そしてある程度の距離まで行くと、体勢を変えて跳び蹴りの状態となり、一直線に木の怪物へと飛んでいく。

木の怪物はバリアを張ってチェイサーの跳び蹴りから身を守ろうとするが、何も無かったかのように破壊される。

チエイサーの必殺技、エグゼキューション・バットは木の怪物へと当たり、ジュエルシードを残して爆散する。

余りにも強力無慈悲な攻撃に、なのは達は固まるが、なのはとフェイトは役目を思い出して、ジュエルシードを封印しようとする。

当麻と美結はチエイサーを睨みつけている。

チエイサーはバイクの方へとゆっくりと歩き出す。チエイサーの向かう方向には当麻と美結の二人。

チエイサーはウイングスナイパーを解除して、ブレイクガンナーを手を歩く。

そして右手に持ったブレイクガンナーを当麻達に向ける。

「俺と戦え。俺の目的のためにな」

二戦目

ブレイクガンナーからエネルギー弾が発射される。

美結と当麻は咄嗟に左右に転がり、どうにか回避する。

「クソ！やるしかないのかよ!!」

当麻は両手に愛用の双剣を投影する。美結もデバイスをソードモードに切り替える。

「ハア！」

「ッ!？」

当麻の強化の魔術による脚力は、チェイサーが前に戦闘した時よりも強化されている。市街地での戦闘の後、自分の魔術の強化、解析、投影を一から見直して、全ての技術の練度をあげることに専念した。

剣、槍、弓の基本骨子から見直し、解析し、複製することだけをしてきた。その結果、当麻の魔術は前回の戦闘よりも全体的に性能が上がっていた。

当麻の黒い剣をブレイクガンナーで受け止める。

黒い剣——莫耶を反対側から迫ってきた干将に流すようにぶつけさせる。

ブレイクガンナーから黒い剣が離れたので、エネルギー弾を連射する。

当麻は後ろに飛ぶことでこれを回避。飛んだと同時に干将・莫耶を回転させるように投げる。

チェイサーは瞬時にエネルギー弾で双剣を破壊、当麻のことを追おうとするが、隙を伺っていた美結に気付き、バイラルコアを呼ぶ。

《Tune chaser spider》

バイラルコアをブレイクガンナーにセットする。ブレイクガンナーを中心にチェイサーの右腕に爪の様な武器、ファンクスパイダーが装備される。

「まずはお前からだ」

迫ってきた美結に向けてチェイサーが飛び出す。美結のサファイアとファンクスパイダーがぶつかり合う。火花を散らしてチェイ

サーが押ししていく。美結は堪えようとするが、ライダースーツのお陰で強化されたチエイサーに敵わずに、後ろに押し出される。

「まだよ！サファイア！」

《BIND mode》

サファイアの魔力刃の部分が鎖へと変わり、チエイサーの右脚に絡みつく。チエイサーはファンクスパイディーで破壊しようとするが、美結は大量の魔力を流し込んでいるため、なかなか壊れない。

「当麻！今よ！」

「投影、開始」

「チイッ！」

美結が叫んだ方には当麻が弓を構えている。その弓に引かれている矢は捻れた剣。

チエイサーは鎖が壊れないのに苛立ち、マズルを押し。

《execution full Break spider》

「・・・偽・螺旋剣Ⅱ！」

少し為を入れて当麻の弓から衝撃波を飛ばしながら剣が放たれる。だがチエイサーもそれで終わるほど甘くはない。

「オラアッ！」

チエイサーは右腕にエネルギーを貯めた一撃、エグゼキューションスパイダーを放つ。偽・螺旋剣Ⅱとエネルギーなお互いぶつかり合い、拮抗していく。本来なら最大限まで改造され尽くしたブレイクガンナーの出力が勝るだろう。だが人が作り出した咄嗟の調整が効かない科学と、威力、射程、範囲に至るまで咄嗟に調整できる魔術。

当麻はこの一撃に、自分の魔力を殆ど費やした。その証拠に、投影していた弓は消え、飛行することすら困難なレベルに達している。科学の一撃と、魔術の神秘による一撃。

その二つは周りに衝撃波を撒き散らしながら、お互いがその威力に耐えきれずに爆散した。爆風は戦っていたフェイトとなのはまで届き、魔進チエイサーとなっている幽雅も本気で踏ん張って飛ばされないうように堪えていた。

爆風が止み、二つの力がぶつかった場所には、地面が抉れ、クレイ

ターが作られていた。

「ガッ！ゴバアッ！」

「当麻！」

魔力を使い切り、身を守ることも出来なくなり、地面に叩きつけられ血反吐を吐く当麻に美結が駆け寄る。当麻の状態は最悪の一言で、右腕がおかしな方向に曲がり、魔力の大量消費による体力の低下、投影した偽・螺旋剣Ⅱに限界量の魔力を流し込んだ反動で意識がとびかけていた。

反対の魔進チェイサーもかなり危険な域に達していた。装甲は傷が入り、いつ崩壊してもおかしくはない。中身の幽雅も少し意識がとびかけていた。

チェイサーのエグゼキューションスパイダーは遠距離と言えるほど、射程は長くはない。だから爆風を中距離ほどの位置で受けたので、いつ変身が解除されてもおかしくはなかった。だがチェイサーは当麻に向かって足を引きずりながらも歩いていった。

「ハア、ハア・・・」

少し動く度にチェイサーの装甲が剥がれ落ちていく。その光景はまるでゾンビのようだった。

遠くで見ているフェイトとなのはは絶句している。

そしてついに当麻の少し前まで辿り着く。チェイサーの前には立ち塞がるようにサファイアを構えた美結が立っている。

ふと、チェイサーはなのはとフェイトの方に目を向けると、呆然としていたなのはにフェイトが襲いかかっている光景が目についた。

「これ以上当麻に何かするつもりなら、私はあなたを絶対に倒す・・・！」

「・・・」

何も言わないチェイサー。チェイサーは手に持ったシフトカーをブレイクガンナーにセットする。

《Tune MAD Doctor》

美結を押しつけてチェイサーは当麻の患部にブレイクガンナーのマズルを押し付ける。

美結は、何を……!と言つてチエイサーをどこそうとするがブレイクガンナーから流れ出るエネルギーが当麻の折れた右腕を治療していく光景を見て動きが止まる。

「まさか……あなた治療を……!」

当麻はビクン!と大きく痙攣するが、少し経つと右腕の怪我が治つていった。美結はその光景に目を見開いている。目の前の、敵であった人物がわざわざ怪我を直したのだから。

チエイサーは治療が終わると、力を出し尽くしたかのように地面に片膝をつけた。チエイサーの手からブレイクガンナーがこぼれ落ちる。体からスパークが走り、触れようとした美結の手を焦がそうとする。

チエイサーはどうかしてブレイクガンナーを掴み、立ち上がつてフェイトとなのはの方を見上げる。今行われようとしている一騎打ち。チエイサーはこの結末を見届けようとしていた。

フェイトとなのは、二人がデバイスを構えて突撃していく。美結は目を見開き、少しづつだが意識を取り戻してきた当麻は、未だに痺れる足を無理矢理使役して立ち上がろうとする。

そして二人のデバイスがぶつかり合うその時、

「ストップだ!」

どこからか一人の童顔の黒衣の少年が現れるのはとフェイトのデバイスを掴み止めた。

「ここでの戦闘は危険すぎる」

現れた少年は周りを見渡す。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「時空……管理局……何だ……それは?」

「知らないの!?!」

チエイサーの眩きに驚いた様に美結が叫ぶ。だが美結の声は上に

いる三人には聞こえていなかった。

「デバイスを解除して投降するんだ！」

「くっ……！」

フェイトはクロノの警告を無視してジュエルシールドへと駆けていく。だがフェイトの行動は先を読んでいたクロノの魔法により妨害される。

「投降しろと言ったはず……ッ!?」

クロノが更に投降を呼びかけると、下からエネルギー弾が飛んできたので右に避ける。

エネルギー弾を撃った本人——チェイサーは体からスパークを発しながら無理矢理立っていた。

「逃げろーフェイト！」

叫びながらブレイクガンナーでエネルギー弾をクロノに撃つ。だがその精度は何時もの何倍も悪く、クロノに掠りさえしなかった。

「やめなさいーシュート！」

突然クロノを攻撃し始めたチェイサーに向けて美結が魔力弾を放つ。放たれた魔力弾はチェイサーにモロにあたり、チェイサーを後方へと吹き飛ばす。

「ガアッ……ッ!?」

「え?」

ダメージ量が限界を超えたのか、光を放ちながらチェイサーの姿から幽雅の姿へと戻る。幽雅は地面を転がってようやくやく動きを止める。

「やっぱりあなただったのね。黒崎君」

美結が見透かしたようなことを言う。だがそのようなことは今の幽雅には関係なかった。

「行け……早……く……ッ！」

《Tune Justice hunter》

ボロボロの体でブレイクガンナーにシフトカーをセットする。そしてブレイクガンナーをクロノに向けて撃つ。

放たれたエネルギー弾は分裂して鉄格子となり、クロノを捉えた。

「くっ! 何をする!?!」

「クソッ！ブレイクガンナーも限界か・・・！」

幽雅はブレイクガンナーの出力が低下してきていることに気付いて、すぐにクラックを開き、転がり込む。

クラックが閉じる時にフェイトとアルフが撤退していく姿が見えたので、幽雅はそのまま家のある位置まで戻り、傷付いた体を無理矢理の治療で治して、眠りについた。

失われた気持ち

公園での戦闘から丸一日が経った。

幽雅は学校には行かず、一日中家で過ごしていた。ブレイクガンナーの修理は、新しく追加されたリンカーコアと魔力というエネルギーを使つての、性能向上の為の実験機となる為、一部だけ修理して後は自然修復を待つことにした。

ベルト等を一から作る幽雅にとってこの程度の作業は一時間あればモノ足りる。なら何故幽雅は一日中学校を休んだのか。

幽雅が感じているものは既に幽雅が諦めたもの。摩耗した記憶と共に無くなってしまったもの。

——誰かを助けたい、感情。

幽雅は一度目の転生でロイミュード、プロトゼロとなっている。その時に人間らしい感情は消え失せ、ただ植え付けられた本能に従うだけの機械となった。

二度目の転生ではオルフェノク、ライオンオルフェノクとなり、その頃には既に感情が消えていたのでスマートブレインの犬となって、ラッキークローバーの一員として、人間達を平気な顔で殺し、同胞にしていた。

三度目と四度目はライダーとして生を受けたが、誰かを守ろうとは思えなかった。逆に、非道の限りを尽くした為、自分と自分の集めたライダーと一号とデイケイドが中心となり、自分と戦い、二度敗れた。敗れる度に思った。機械の、プログラムで構成された感情では勝てないと。いつかの破壊者が言っていた。

『人は気持ち次第で強くなれる』と。とうしよはくだらないか、と思っていた。だが衛宮当麻の戦闘を見て、短い間でスペックがライダーに比べて低いとはいえ、初見で魔進チェイサーと相打ちになるほどの成長。

衛宮当麻だけではない。衛宮当麻だけならここまで悩まない。問

題となっているのはフェイト・テストロッサだ。自らがボロボロになり、それでもフェイトのことを逃がそうとした。

（何故だ？俺はプロトゼロとして生まれた頃から、人間に対しての情など既に消え去った。相手がロイミュード、延いてはオルフェノクならまだ分かる。だが人間であるフェイトを今になって何故守る？クリム・スタインベルトがプロトゼロに入れた、『人間を守る』というプログラムが今作動したからか？イヤ、それはない。俺の体は既にロイミュードではない。なら、何故なんだ……）

理解不能——解析不可能——理解不能——解析不可能——理解不能——解析不可能——理解不能——解析不可能——理解不能——解析不可能——理解不能——解析不可能——理解不能——解析不可能——理解不能——解析不可能——理解不能——解析不可能——

答えは——見つからない。

ならば答えを見つけるまで足掻こうではないか。

フェイトが住む高級マンション。そこに幽雅は足を踏み入れている。幽雅が一番持ち運びに便利としているブレイクガンナーは、ゲネシスドライバーに繋がれているので、今はドライバーを付けている。

このマンションは前にフェイトが家に来た時、使い魔であるブラツクケルベロスを使って見つけ出した場所だ。

フェイトの部屋の前に立ち、インターホンを押す。

内側からピンポン、と電子的な鐘の鳴る音が聞こえる。ドタバタと忙しそうな音まで聞こえる。

「入るぞ」

なかなか出てこないの、痺れを切らした幽雅が勝手にドアを開けた。玄関の先にはアルフが間抜けそうな顔でこちらを見ている。

「生きてるか？」

「ふえ!?ゆ、幽雅……？」

幽雅はアルフを無視して奥、フェイトがいるであろう部屋に入る。

フェイトの体を傷だらけで、遠目に見ても包帯が痛々しかった。

幽雅はフェイトの隣に座り、勝手に傷の状態を確認していく。端から見れば、変態の男が少女の肌をガン見しているようにしか見えない。

フェイトは突然現れた幽雅が自分の体をガン見してくることに戸惑っている。

幽雅はため息をついて立ち上がり、ポケットから黒いミニカーを取り出す。

「フェイト、今からお前の傷を治療するから」

「えっと・・・どうしてそうなったの？」

「フェイトの綺麗な肌に傷が似合わないからだ」

フェイトは顔をボン！という感じで赤くする。少し離れたところではアルフが生暖かい目で見ている。

「おい、犬女。お前も手伝え」

「ちよつと！犬女って何!?!」

「フェイトのことを押さえつけていてくれ。今からやるのはかなり荒方法だからな。暴れられるとまともになれない」

《Start your Engine!》

《DRIVE type NEXT!》

ドライブドライバーのイグニッションキーを捻ってシフトブレスに黒いミニカー、シフトカーネクストをシフトブレスに差し込み、ドライブタイプネクストに変身する。

「姿が・・・変わった?」

「この前の、魔進チェイサーと同系統のものだ。始めるぞ」

《タイヤコウカーン!》

《MAD Doctor!》

《Doctor Doctor Doctor!》

ドライブがシフトカー、マッドドクターをシフトブレスにセットし、レバーのように変えて押すと、どこからかタイヤが飛んできてドライブの体についている黄色いタイヤを押しつけた。そしてまたレバーを三回押すと、今度は空中に治療器具のようなものが集まり、

フェイトの周りを浮遊する。

「いけ」

空中に浮いた器具から、エネルギーがフェイトの体に向けて放出される。フェイトはアルフに体を抑えられているため、身動きが取れず、マッドドクターによる激痛を浴び続けている。

「ぐうっ！ああっ！」

アルフは暴れるフェイトを必死に抑えつけている。

数分だっただろうか、幽雅は変身を解除して、ソファで倒れているフェイトに膝枕をしている。

幽雅の前にはアルフがドッグフードを食べている。

「アンタ今日は泊まっていきなよ」

「まあ・・・いいが」

アルフからの提案を渋々受ける幽雅。幽雅は視線を下にして、眠り続けているフェイトの顔を見つめる。

ふと、ある二人の人物のことを思い出す。

一人は機械生命体を率いて、108しかない友達を守ろうとした男。

もう一人は人間と人間の姿を持つ灰の怪人との共存を唱えて、その理想の果てに絶望し、最後に希望を託した一人の男。

その二人の力を幽雅は持っている。前者は自分で作った、最高傑作のベルト、机に置かれたドライブドライバーを見る。後者は今回の転生で貰った特典の一つ。強力無慈悲な帝王のベルト。

幽雅は窓から見える夜景を眺めながら、意識を暗闇に落としていった。

決闘

幽雅はフェイト宅からゾーンメモリを使って家に帰ると、直ぐにドライバーや必要な機器などを片っ端からネクストライドロンに詰め込んだ。

持っていけなかった機器やライドチェイサー等のバイク類も、あるベルトを手に入れた時から使えるようになった。『灰色のカーテン』でどこか知らないところに詰め込んだ。

幽雅は警戒していた。

時空管理局という組織の末端である、アースラは今回の事件が終わったら恐らくこの事を上層部に報告する。

そうなれば当然、この事件に関わった幽雅のことも報告される。

時空管理局は突出した文明品をロストロギアと呼んでいる。それは今回の事件の原因であるジュエルシードもその一部だ。

幽雅のベルトも恐らくはロストロギアに認定される。リンディからの一方的な説明でそのことを真っ先に思いついた幽雅は誰にもバレないところに避難しようとしていた。

ゾーンメモリで姿をチェイスへと変え、ネクストライドロンに乗り込み車を出す。

幽雅が目指している場所はただ一つ。

八神はやての家のみ。

幸いにも幽雅は前に会った時に住所を教えて貰っていたので迷わず進むことが出来た。

ネクストライドロンを八神家の近くに停車してゾーンメモリを排出して元の姿に戻る。

玄関についているインターホンを鳴らしてはやてを待つ。

「は〜い」

呑気な声と共に車椅子に乗った少女が玄関から顔を出す。

「居候させてください」

幽雅はプライドを捨てて地面に土下座しながら懇願した。

「とりあえず、なか入ろっか？」

「それで面倒事が広がりすぎで自分に飛び火する前に避難してきたっちゆうことやな？」

「はい……」

幽雅は今八神家のリビングで正座していた。はやてにした説明は魔法やライダーのことを隠してかなり絶妙なラインで説明していたと幽雅は考えていた。

「ええよ。面倒事が終わるまで、幽雅はうちに居候して」

「ありがとう、はやて」

幽雅ははやての頭を撫でる。はやては顔を赤くし、俯きながら何かブツブツ呟いているが、幽雅には聞こえてない。

「それじゃあ、俺はもう寝るから、おやすみはやて」

「あつ……」

はやての頭から手を離すと、はやてが物欲しそうな顔で幽雅を見るが、幽雅は気付かずに与えられた部屋へと入っていく。

「これが恋なんかなあ……？」

一人リビングに残ったはやては両手を胸に当てて、頭を撫でられた余韻に浸っていた。

幽雅は貸し与えられた部屋を小規模に改造していた。

改造といっても、引き続きベルトの調整、製作に必要な機材を門っ子に設置しただけの簡単なものしかしていない。

ベルトの入っているアタッシュケースはベッドの下に隠している。

「さて、今はどのくらいの数値かな？」

パソコンに送られてきたデータを眺める。前回の魔進チェイサーとしての戦闘で溜まったデータがゲネシスドライバーを完成一歩手前まで近づけたのを見ると、幽雅の頬は自然につり上がっていた。「後少しだ。後少しでこのベルトも完成する。プレシア・テストロッサ、お前が早く何かを祈ることを祈ってるよ」

「なぜ俺はここに居るんだ？」

「いいから黙って見ていなさい」

幽雅は何故か海鳴の臨海公園に連れてこられていた。

どうしてこうなったのかと言うと、

- 1、ブレイクガンナーの修理が終わったので久々に散歩に。
- 2、美結、当麻、なのはに遭遇してしまい、これからフェイトと決着をつけるからお前もこい、と言われて拉致られる。

- 3、当麻、美結と眺めている。↑今ココ。

「しかし、こうして見ると魔法は凄いな」

上空ではフェイトとなのはが砲撃戦をしている。

フェイトのフォトンランサーをなのはが防御魔法で防ぎ、仕返しとばかりになのはが魔法を撃ち込む。一撃が強力な魔法を永遠と撃ち続けている。

『photon lancer』

『divine buster』

「ファイア！／シュート！」

二人の砲撃魔法が放たれる。互いの魔法はぶつかり合い、中心で爆発を起こし、衝撃波をまき散らす。魔法のぶつかり合いで二人の視界が阻まれる。

だがその中でも的確に動ける者がいた。

《scythe slash》

経験の差で、フェイトなのはの背後に回り込んだ。

高機動型のフェイトの得意とするスピードで相手の背後に回り込み、攻撃。

勝ち方としては美しい勝ち方だ。

フェイトは勝利を確信した。視界が塞がれた中で、背中を見せたのだから。

フェイトはデバイスであるバルディッシュを振りかぶり、目の前の相手を切り裂こうとする。

なのははそれを――

避けた。

前に行っていた体を無理矢理回し、スケートのように避けてみせた。

「天性の才能か・・・」

幽雅は思う。自分がどれだけこの才を求めていたか。

だが自分では得られないと悟り、安直に力を求めたのか。

だがフェイトの攻撃はこれで終わらない。フェイトは今まで何度もなのはと戦ってきた。だからこの攻撃をよけられることを大体分かっていた。

なのはが避けた先に見た、雷を纏った無数のスファイア。

《fire》

バルディツシユの声と共にスファイアがなのはに向けて放たれる。なのはは咄嗟に防御魔法を使うが、一撃が重く少しづつ押されていく。

なのははスファイアを全て弾ききり、弾かれたスファイアは海へと落下した。

フェイトがなのはの対面に行き、お互い見合う。

二人ともこれまでの魔力運用で疲れきって、肩で息をしている。

（最初はただ、魔力が多いただの人間だと思っていた・・・でも今は、速くて、強い・・・。迷ってたら、やられる！）

フェイトは目の前にいる自らの敵を評価する。高々魔導士になって一ヶ月しか経ってないのに自分と張り合っている相手。

だからこそ、使うと決めた。自分の切り札である魔法を。

フェイトがバルディツシユを胸に構えると、空中に金色の魔法陣が浮かび上がっては消えていく。

《phalanx shift》

なのはは迎撃しようとするが、さらに空中に現れまた魔法陣に、両腕を縛られる。

「ライトニングバインド」

「まずい・・・！フェイトはアレを使おうとしている！」

幽雅達と観戦していたアルフが叫ぶ。幽雅はそろそろ終わる頃だ

ろうと思ひ、メテオスイッチを握っている。

「アルクス、クルタス、エイギアス。煌めきたる天神よ。今導きの元来たれ。ザルエル、バウエル、ブラウゼル」

フェイトの詠唱が終わり、フェイトは最後の攻撃に移ろうとする。フェイトの周りのスファイアが勢い良く光る。

「フォトンランサー・・・フアランクスシフト」

フェイトが空に手を掲げる。

「打ち砕け。ファイア！」

スファイアがなのはへと無慈悲に襲い掛かる。

なのはは何も出来ずに、ただ攻撃を喰らっていく。

「なのは!!」

「辞めなさい!」

当麻がなのはを助けようと、赤い外套に見を包むが、美結に引つ張られる。

煙が晴れ、次第に爆心地が見えてくる。

「なんだと?」

煙の先にあつた光景を見て幽雅が疑念の声を上げる。幽雅はあと攻撃を喰らって無傷でいられる自身はない。確実に少なくないダメージは残る。

だが煙の先、なのはは平気そうな顔をして、まだ立っていた。

「打ち終わると、バインドつても解けちゃうんだね。」

今度はこっちの——!」

《divine》

「番だよ!」

《BUSTER》

なのはのデバイス、レイジングハートから極大の魔法が放たれる。フェイトはなけなしの力を使ってスファイアで迎撃するが、呆気なく打ち消される。

なのはの魔法はフェイトへと直撃する。フェイトはギリギリ防御魔法を張るが、なのはの砲撃の前では耐えきれない。

だがフェイトは諦めない。限界まで力を振り絞り、全て防御魔法に

かける。

なのはの砲撃が終わり、フェイトはボロボロになりながらも耐えきった。

だが、白い魔王は未だ健在。

「受けてみて。デイベインバスターのバリエーション」

なのはがレイジングハートを掲げて宣告する。なのはの前に先程より巨大な魔法陣が形成される。

《Starlight Breaker》

魔力が固まり、着々と力が貯められていく。フェイトも黙って見ているわけではなく、守る程の魔力もないので避けようとするが、そこで気付く。自分の手足がバインドされていることに。

「これが私の全力全開……スターライトブレイカー!!!」

なのはがレイジングハートを突き出し、魔法を発動する。

その威力は名前に相応しい、星を砕く様に見えるピンクの光の柱。

魔法はフェイトを飲み込み、海へと着弾する。

幽雅でさえ、これはないな、と言いながら首を振る。

光の柱が消えると、そこにはフェイトを抱えたのがいた。

娘

なのはとフェイトの決闘はなのはの勝利で終わった。

現在二人には幽雅、当麻、美結、ユーノ、アルフ。そしてアースラからの視線が向いている。

前の三人以外からは暖かい視線が。幽雅と当麻、美結は戦う時を目をしている。

天気が曇り、雷雲に覆われていく。その突然の変化の中、動けたのは三人だけ。

「来たか！」

「行くわよ！」

当麻はいつもと違い、武器を持たずになのは達のところへと駆け出す。美結は魔力を放出して限界まで疾走する。

雷雲は渦を巻き、雷を放出する。

放出された先には——フェイト。

《Meteor ready?》

「変身」

幽雅はあらかじめ用意していたドライバーでメテオとなり、変身した直後限定で現れるメテオを覆うコズミックエナジーの球体で当麻達より早く移動し、雷を防ぐ為に盾となる。

だが時間が経てばコズミックエナジーの球体も消え、メテオもフェイトもなのはも無防備になる。加えてメテオが球体を維持できる時間はかなり短い。

対してこちらは魔力がある限り続けられる雷。

球体は時間と共に消え、雷はフェイトをに襲いかかり、バルディッシュを砕き更なる雷を放ちながらフェイトの所有するジュエルシードを回収してしまった。

『熾天覆う七つの円環』！

メテオに先を越された当麻が追撃してくる電撃を、投影した七枚の花弁で受け止める。だが即席で作りに出した花弁は強度が足りずすぐに砕けてしまう。

花卉が砕けたら、雷の追撃はなくなった。フェイトはなのはの腕の中で気絶している。

当麻達にアースラに来てくれと言われたが、後で合流すると伝え、幽雅は目的のために動き出した。

時の庭園

プレシア・テスタロッサは焦っていた。自分と娘に残された時間は少ない。そしてフェイトを襲った時の魔法で自分の居場所は管理局に特定された。

既にプレシアの体は病でボロボロ。床にはプレシアが吐血した血液が散乱している。

プレシアはテーブルに置かれたガイアメモリを手に取る。ダークドライブと名乗るものから渡された、自分に力を与えてくれる物。使い方が分からず、どうすればいいのかとずっと悩んでいた。

「無様な姿だな」

ホールに響いた聞き覚えのある声。プレシアは音源へ顔を向けると、そこにはガイアメモリを渡してくれたダークドライブがいた。

「何の用かしら?」

「いや、ソイツの使い方を教えていなくてね」

《SP SP SPEED!》
「なっ!?!」

ダークドライブはレバーを三回倒し、目にも留まらぬ速さでプレシアへと近づき、腕を掴む。

「こうだ」

ドライブはどこから取り出したのか、不可思議な機械をプレシアの腕へと押し付け、引き金を引く。

チリつとした痛みがプレシアの脳を巡り、ドライブが機械を押し付けた部位を見ると、奇妙なあざが出来ていた。

「これを、こうする」

《TRIGGER》

ドライブはガイアウイスパーを鳴らし、プレシアの腕に押し付ける

直前でやめる。

「簡単な手順だろ？チツ、もう来るのか。俺はここで失礼させてもらうよ」

《ZONE》

「待ちなさい！」

プレシアの静止の声を聞かずに、ダークドライブはまたもゾーンメモリで何処かへと溶けるように消えていった。

決戦はまだ始まったばかり。

「来たぞ」

幽雅は一度ゾーンメモリで家に帰って、家主のはやてに遅くなると伝えてからゲネシスドライバーに持ち替えてアースラの中に転移してきた。

「手伝ってくれるのか？」

「別にお前の為でじゃない。自分の中にある違和感を払拭するために来たんだ」

幽雅の中にある違和感。白い服を着て両手を手錠で抑えられているフェイトの方へと目を向ける。

「フェイトがか？」

当麻が疑念の声を上げる。

「これ以上は話すつもりは無い。ここから先は俺の過去に関わるのでな」

幽雅はそれだけ言うと、正面にいるリンディに目を向ける。

（前も思っただけど、なんて鋭い視線なの。子供が出せるものではないわ）

「画面に集中しなくていいのか？」

幽雅にそう言われて全員モニターの方を見る。モニターには武装局員の一人からの映像が流されていた。

局員達は扉を通り、ある通路に出る。

その通路は植物に所々が侵食され、暗い不気味な雰囲気を出していた。

通路の先にある唯一の淡い光源。

局員達がそこに近づいていくにつれ、そこにあるものが鮮明に見えてきた。

「え？」

フェイトの声か、なのはの声か。誰の声かはわからない。だがそこにあつたものは、今アースラにいる者達を驚かせるほどの代物。

透明なカプセルの中で、液体と共に浮き続ける金髪の少女。

—— フェイトによく似た少女だった。

「……やはりか」

「黒崎君？」

「いや、なんでもない」

幽雅の誰にも聞こえない位の声をなのはは聞いて、幽雅に目を向けるが、幽雅は何もなかったかのように否定した。

(いま、やっぱりって………黒崎君は何か知っているの?)

(やはりフェイトはプレシアの本来の娘ではない。前にあつた時、奴は娘の蘇生が目的と言った。だがプレシアにはフェイトという娘がいる。しかしフェイトの体にあつた傷はプレシアからつけられたもの。娘の蘇生≠フェイトなら、フェイトは何処からか拾ってきたもの、もしくはクローンだが……前者はありえない。わざわざ蘇生させることが出来るなら拾う必要性はない。それにフェイトが本来の娘だとしたら、なぜ虐待する必要がある? 片方の娘を蘇生させたいほどに愛しているのなら、もう片方も同様のはずだ。となると、やはりクローン……大方、フェイトで満足しようとしたが、似ていないところでもあつたのだろう。それが理由で娘の蘇生という方法に至った……)

幽雅の考えは全てではないがほとんどの的を射ていた。だから幽雅が最初にプレシアの『悪』を否定した。

幽雅は今までの転生で様々な他人の『悪』や、それを実行する理由

を聞いてきた。

ハートロイミュードなら108しかない友達と共に新たな生命体になるため。

ホースオルフェノク、——木場勇治なら、人間に絶望し、オルフェノクで世界を統一するため。

他にも沢山あった。仲間を集める過程で聞いてきた過去。自分が知らないところで起きていた悲劇を。

だからこそ幽雅はプレシアを否定する。亡くしたものを、永久に帰らないと知っているものを否定しようとするプレシア・テスタロッサを、幽雅は否定し続ける。

幽雅はいつの間にか右手に握っていた一枚のカードを見つめた。まるで、自分がなくしたものがそこにあるかのように。

『もうダメ、時間がないわ。たった9個のロストロギアではアルハザードにたどり着けるかわからない』

プレシアは容器に入った自分の娘、"アリシア・テスタロッサ"にすがりついていた。

プレシアの背後にはアースラの武装局員達が倒れている。

『でも、もういいわ。終わりにするの』

プレシアは首だけを振り向かせて、アースラの映像に介入する。

『フェイト、やっぱり貴方はアリシアの偽物よ』

プレシアがフェイトへ向けて言った言葉は、フェイトの心を抉った。

『アリシアを蘇らせる間に、私の慰みに使うだけのお人形。どこへなりと消えなさい！』

「お願い！もうやめて！」

なのはがモニターに向かって叫ぶ。だがプレシアは愉快そうに笑い始める。当麻は拳が震えており、美結も抗議の目を向けている。

唯一、幽雅だけが興味のなさそうな目でプレシアを見ている。

『いいことを教えてあげるわフェイト。私は初めてあなたと会った時から、あなたのことが……大嫌いだったの』

フェイトは崩れ落ちる。静まった管制室でフェイトの両腕に付けられている鎖が音を出す。

音がしてすぐに、オペレーターのエイミーが声を上げる。

「時の庭園内に、魔力反応多数!」

「始まったか・・・!」

エイミーの報告に、当麻が顔を顰める。報告される魔力反応はまだ増えていく。

『誰にも邪魔させない。私達の旅を。その為ならばケモノにでもなつてやるわ』

《TRIGGER》

プレシアが青いガイアメモリ——トリガーマemoryを取り出し、ガイアウイスパークを鳴らす。

「あれは、ガイアメモリだ?!」

当麻が持つものを見て叫ぶ。この場にいる殆どがああのメモリの様なものを知っている当麻に怪訝な顔をした。

『ふん!』

プレシアはトリガーマemoryの端子の先を自分の腕——ドライブに生態コネクタを取り付けられた腕に刺した。

変化は劇的だった。

プレシアの体は人間のものから異形のそれに变化した。

青い体に右腕には管理局では質量兵器と言われ、地球ではライフルと呼ばれる銃が生えていた。

プレシアには既にプレシアとしての面影はなく、ガイアメモリから生まれる怪人、トリガードーパントだけが残った。

残った左手の甲に、フェイトのバルディッシュの待機携帯に似たものが付着している。

プレシアが何かしたのか、アリスアの入っている容器が浮かび上がり、プレシアの背後に浮遊し始める。

「タイムリミットまで、あと60分・・・」

今度こそ幽雅の声は誰にも聞かれなかった。

実戦

プレシアの言葉によりフェイトは崩れ落ちた。なのはや当麻が駆け寄るも、その目に光はなく呆然としている。

だが幽雅だけは周りとは違う動きをした。

「リンディ・ハラオウン。プレシア・テスタロッサがああなった以上、殺害は許可されるか？」

その言葉に全員がギョツと目をむく。今も次元振は続いている。プレシアはたとえ次元振が起ころうともアルハザードへ向かおうとする。確かに一番効率のいい方法だろう。だがその許可を目の前でプレシアに裏切られたフェイトの前ですることではない。

案の定、幽雅に当麻が掴みかかった。

「そんな話を今彼女の前でする場合じゃないだろ!!」

当麻は大声で幽雅を責め立てる。だが幽雅は表情を変えずにいる。

「許可を出すのはお前ではない。俺はこの場の指揮官であるリンディ・ハラオウンに聞いてるんだ」
「うわっ!」

幽雅は当麻の手を捻り足払いをかけて転ばせる。掴まれた襟を直し、今一度リンディに顔を向ける。

「プレシア・テスタロッサの殺害は許可できません。捕獲にしてください」

「善処しよう」

「待て……!黒崎……!」

「ようやく素の状態のお前の言葉が聞けたな。善人ぶっていい子ちゃんという言葉を発していた時よりはだいぶマシだぞ?まあ、そんなことはどうでもいいか」

幽雅が懐からゾーンメモリを取り出す。

「それは……!?!」

リンディはそれを見て驚愕する。幽雅が手に持つメモリは色は違えど、プレシアが使っていたものと同じ代物。クロノはメモリを見て反射的にデバイスを構える。

《ZONE》

幽雅はプレシアの時とは違い、ドーパントにはならず、その場から消えた。

「今のは・・・」

その光景を見てリンデイは思考を始める。自分たちとは違う転移魔法とは違い、魔力すらも感じられない。手に持っていたメモリがデバイスの代わりだとすると、軽量化が恐ろしい程に進んでいる。

「まさかアイツの使う二つ目のドライバーは・・・！！」

「当麻君、何か知っているの？」

この中で唯一仮面ライダーを知っている当麻が答えに至る。当麻に魔進チェイサーの知識はなかったが、鎧武までの知識はあった。そして幽雅が使ったガイアメモリは鎧武より前のライダー。

「あれはガイアメモリ。地球の記憶を納めた強力な変身道具です」

「地球の記憶だと？」

「ええ。あのガイアメモリはAからZまであり、あるドライバーと使うことで変身することができます」

「前に見たあの機械のバケモノのようなもの・・・ちよつと待ってくれ、プレシア・テスタロツサはメモリだけで変身していたが？」

クロノが気付く。気付いたことは当麻が知る限りでは最悪の事柄。

「ガイアメモリは大量の毒素が含まれています。ドライバーはその毒素を中和して、所有者が安全に使うために作られました。だがプレシアはドライバーを使わず、そのまま腕に指した。今プレシアの身体は強力な毒素に蝕まれています。だからもしプレシアをあの状態のままにしていれば・・・」

「最悪死ぬってことね」

リンデイがこれまでの会話から答えを出す。

「どうにかする方法はないの!?!」

「落ち着きなさい、なのは。当麻君、方法はあるのよね？」

なのはを抑える美結が当麻に問いかける。当麻は首を倒し頷く。

「なら教えて」

「分かった。プレシアをあの状態にしているのはガイアメモリだ。な

らそのガイアメモリを体内から取り出せばいい」

「一体それをどうやる?」

「本来ならメモリブレイクっていう必殺技を使うんだけど、多分強力な攻撃でもいいと思う」

「どれ位なの?」

「なのはのスターライトブレイカー位の威力があればメモリは抽出出来ると思う」

本来なら当麻は幽雅に頼むところだが、その幽雅は現在行方不明。当麻が投影した勝利すべき黄金の剣を使えばスターライトブレイカーよりも強い威力が出せるが、魔力を使いすぎて帰れなくなる。

「分かった。私がやる!」

なのはが覚悟を決めて宣言する。リンディは仕方ないと思い許可をだそうとするが、オペレーターという言葉により遮られる。

「何があったの!?!」

「艦長!これを!」

モニターに表示される時の庭園内部の映像。その中には、ゾーンメモリで消えた幽雅がいた。

「下級ロイミュードよりも弱そうなやつが群がってやがる」

時の庭園、プレシアのいるホールへと向かう扉の前には百を超える傀儡兵がいる。その少し前の場所にまで転移した幽雅は完成したドライバー、ゲネシスドライバーを腰に巻く。

「さて、試させてもらおう」

《メロンエナジー》

幽雅が取り出した青いクリアパーツにメロンが刻まれた、エナジーロックシードを解錠する。

《LOCK ON》

《ソーダー!》

《メロンエナジーアームズ》

頭上に現れたメロンが幽雅に被さり、鎧へと展開する。展開された姿はアーマードライダー斬月に酷似しているが、色合いが増してい

る。

手にはアームズウエポンのメロンディフェンダーではなく、エナジー系ロックシード共通の《創世弓ソニックアロー》が装備されている。

——天下無双の白き鎧武者、仮面ライダー斬月・真

「ハイ！」

斬月は向かってくる傀儡兵にソニックアローのエネルギー矢を放つ。矢は一直線に進み、傀儡兵に刺さる。

「いい性能だ。文句無しだな」

斬月は続け様に矢を放つ。その矢は存分変わらず傀儡兵を戦闘不能にしていく。

「近距離か。いいだろう」

近接装備を持った傀儡兵にソニックアローの両端に付属しているヤイバ《アークリム》で武器ごと切り裂いていく。ソニックアローはブレイクガンナーと違い近距離と遠距離を切り替える時の動作が必要ないので、休むことなく傀儡兵を破壊している。

その姿は正に、天下無双の白き武者。

「こつちも試すか」

《LOCK OFF》

《LOCK ON》

メロンエナジーロックシードをベルトから外してソニックアローに付ける。斬月はそのまま弓を引き絞り、傀儡兵に狙いを定める。

《メロンエナジー》

斬月・真の必殺技《ソニックボレー》が傀儡兵の中でも防御が硬そうな傀儡兵に刺さり、周りを巻き込んで爆発していく。

「諸共に消えろ」

斬月は更に傀儡兵を破壊する為に、敵に向かって走り出す。

「凄い……」

なのは、当麻、美結、ユーノとクロノに出撃許可を与えたりリンディはモニターの前で呆然としていた。

いや、リンディだけではなくモニターを見ている全員が、斬月・真の戦いを見て唾然としていた。

斬月・真からは魔力反応が検知されている。だがそれは足場として固めた魔力だけ。斬月・真とソニックアローからは魔力反応は一切確認されていない。

管理局が知らないところに、天才魔導師であるプレシア・テストアロツサの傀儡兵をたった一人で壊滅させている男の子。確かにベルトの力もあるだろうが、本人の実力も高い事はリンディから見てもわかる。

未だに増え続ける傀儡兵から一撃も貰わず撃破していく戦闘力。魔導師相手にもおそらく無傷で勝利できるだろう実力。

人員不足の管理局がこれを知ったら、彼をどうするかは火を見るより明らかだ。

だが彼が反抗した場合、管理局がどれ位のデメリットを受け、彼を捕獲した時のメリットを考えるとどうなるか。

リンディは斬月に近づいていくのは達の反応を見て、とてつもない程の不安感が溜まっていった。

幽雅を取り巻く状況が、変わっていく。

「流石にキリがないな」

斬月は先程まで戦っていた場所から離れ、今は既に扉の中へと侵入している。既に何度目かわからないソニックボレーを傀儡兵に向けて撃つ。

「チツまだ増えてやがる」

減らしても減らしても現れる傀儡兵。幽雅は同じ敵とばかり戦い心が疲弊していた。幽雅にとってこれはもう戦闘ではなく、RPGのボス攻略後のレベル上げと同じようなものだった。

幽雅がソニックアローに矢をつがえようとすると、背後から魔力弾と何本もの剣が飛来し、傀儡兵を破壊していく。

「来たか」

「君は、幽雅なのか？」

先頭で走っていた当麻が斬月・真の姿を見て唾然とする。いや、その前に床に落ちていている傀儡兵を見て全員が驚いている。

「君は何者なんだ？」

「そんなことはどうでもいい。それよりも、お前達はお前達のやるべきことがあるんじゃないのか？」

斬月は話しながらも向かってくる傀儡兵に向けて、傀儡兵を「見ないで」矢を当てる。

クロノは自分の問いかけを無下にされたことを少し苛立ちながらこの場での最善の判断を下す。

「なのは、ユーノ、美結は動力炉の破壊を頼む。当麻は僕と一緒にプレシア・テスタロッサの確保を。幽雅はこのまま出てくる傀儡兵を倒してくれ」

「俺に命令するな」

斬月はそう言ってソニックアローで傀儡兵を射る。

クロノはそれを見届けて当麻に目配せし、プレシアのいる所へと走り出す。

「黒崎君。全部終わったら、フェイトちゃんとちゃんと話してあげて」

なのはが矢を撃ち続ける斬月に言う。斬月は何も言わずに黙々と矢を撃ち続ける。

「なのは！行くわよ！」

「分かったの！」

美結がなのはを呼び、なのはは動力炉へ向けて走り出す。斬月は一度だけその後ろ姿を見て、何もなかったかのように傀儡兵の相手をはじめた。

幽雅は退屈過ぎて気付かなかった。傀儡兵の数が少しづつ減ってきていることに。

そしてなのはたちが向かった方向に、プレシアと同じ異形が2体、向かっていたことに。

地球の記憶

傀儡兵と共に現れた2体の異形。

何故それが現れたのかは神にしかわからない。

だがある程度は予想がつくだろう。

たとえば彼らに意思がなくとも、本能的にこう言うだろう。

——そこにライダーがいるから、と。

アースラ内のフェイトが眠っている病室。

この場には先程までアルフがいたが、彼女は時の庭園攻略の為に攻撃していった。

故に病室にいるのはフェイトのみ。

フェイトが首を動かして表示されているモニターを見る。

モニターにはなのはとアルフが表示されている。

また、別のモニターには傀儡兵を破壊していく斬月・真の姿が。

「母さんは、最後まで私に微笑んでくれなかった。私が生きていたいと思っただのは、母さんに認めて欲しかったからだ。どんなに足りないと言われても、どんなに酷いことをされても。だけど、笑って欲しかった。あんなにはつきり捨てられた今でも、私まだ母さんにすがりついている」

画面を見ているフェイトの口から漏らされた言葉。プレシアに破壊されたが、核が無事だったバルディッシュは黙って聞いている。

「生きていたいと思っただのは、母さんに認めてもらいたいからだ。それ以外に、生きる意味なんてないと思っていた。それができなきや、生きていけないんだと思っていた。捨てればいいってわけじゃない。逃げればいいってわけじゃ……もつとない」

フェイトは罅が入っているバルドイツシユを手取る。バルドイツシユはボロボロで、いつ崩れてもおかしくはない状態だった。フェイトはそんな相棒を見つめて決意する。

フェイトはバルドイツシユに魔力を流すと、バルドイツシユの傷が消えていき、完全な状態へと戻る。

「幽雅も戦っている。何の関係もない、私の為に。私はまたそれに頼ろうとして、勝手に全てを終わらせようとしている」

画面の向こうにいる鎧武者に目を向ける。鎧武者は怒涛の勢いで戦って、何故かなのは達の方を指している。

「私たちのすべては、まだ始まってもない。だから、本当の自分を始める為に」

フェイトはバルドイツシユを構え、バリアジャケットを装備する。フェイトの顔は憑き物が落ちたような顔をしており、戦いに行く戦乙女のように見える。

「今までの自分を、終わらせよう」

金色は出撃する。

始まりを得るために。

斬月は焦っていた。先程までの戦いっぷりは影を潜め、今は最低限の敵だけを倒している。

だがその敵も残り僅か。

斬月は数分前に傀儡兵の残数が減っていることに気付いた。それと同時になのは達が向かった動力炉の方からとてつもない程の不安感が襲っていた。

斬月はこれを予想外の事態が必ず起こると確信し、上に登るのを邪魔する傀儡兵だけを倒していった。

下からは残っている傀儡兵が上に飛ぶ斬月を追いかける。

「クソッ！邪魔だ！」

《LOCK ON》

《メロンエナジー》

斬月は何度目か分からないソニックボレーを放つ。先頭にいた傀

傀儡兵に矢が刺さり、周りを巻き込んで爆発していく。

「アレは、フェイトか——！」

上ではフェイトが傀儡兵にサンダーレイジを撃つてなのはの援護をしていた。

どこから湧いてきたんだよ！と悪態をつきながら下から援護する。

上に向けてソニックアローの弓を引き絞りエネルギーを貯める。メロンの形のエネルギー矢を放ち、限界点まで到達すると、メロンが割れて数多のエネルギー矢が降り注ぎ、傀儡兵を破壊していく。

「幽雅！」

「何している。さっさと自分たちのやるべき事をやれ！」

幽雅の叱責でなのは達は動力炉を再度目指そうとするが、唐突にそれ等は現れた。

「キヤアッ！」

「フェイトちゃん！ッ！」

高速で移動しフェイトのことを斬月のいる所まで蹴り飛ばす。なのははフェイトに駆け寄ろうとするも、接近してきたそれなのはに剣を振りかざし、なのはは本能的にレイジングハートで抑える。

「よっと、何している」

「幽雅、あれ」

フェイトが指さした方にはなのはと罅迫り合いをしている体が水色の人型の異形と、その後には控えている茶色い体毛が生えた猫のような異形。

幽雅はそれを見て呆然とする。何故ならそれは本来存在することのないものなのだから。

「フェイト、俺が隙を作るからその間にお前らは行け。いいな」

「幽雅は!?!」

斬月は幽雅の問いに答えず、異形に向けて斬りかかる。水色の異形はなのはを弾き飛ばし、剣でソニックアローを抑える。

「黒崎君!?!」

「なのは！幽雅が抑えているうちに早く！」

なのははフェイトに手を引っ張られ動力炉へと向かっていく。

ユーノとアルフもそれに続く。

斬月は誰もいなくなつてやりやすくなつた所で、水色の異形、ナスカドーパントに話しかける。

「何故お前らがここにいる？どうやって現れた」

「………シッ！」

「チッ！クソツタレが……！ッ！」

何も答えないナスカは更に力を込めて斬月を押す。斬月は迎え撃つように同じく力を込めるが、斬月はここでミスを犯す。

鏝ぜりあつていた斬月の背中を控えていたもう一体の異形、スミロドンドーパントが爪で斬り掛かる。斬月は体を横に倒すことで回避するが、ナスカが体勢を崩した斬月に一太刀入れる。

「クソが。高速移動が2体か。メロンじや相性が悪すぎる」

（あの2体の特徴は高速移動。それに加えてスミロドンは野生の勘。更には2体ともバリバリ空飛んでる。やはり使うか？だが完成したとはいえ微調整が必要なゲネシスドライバーで、どこまで耐えられるか）

幽雅が考えている間にもナスカとスミロドンはお互いの得物で斬月に襲いかかる。高速移動で攻めてくる2体をこれまでの経験だけで躲せるはずもなく、斬月の体に着々とダメージが溜まっていく。

（やるしかない!!）

斬月はナスカに狙いを定めソニックアローを振り回し斬撃を与える。ナスカが引いた瞬間、斬月は後方へと飛び下がり、赤いロツクシードを取り出す。

《ドラゴンフルーツエナジー》

《LOCK ON ソーダ》

《ドラゴンエナジーアームズ》

纏っていた鎧が弾け飛び、弾け飛んだ鎧がスミロドンに当たり、スミロドンは吹き飛ばされる。斬月のスーツが変わり、白かったボディが青く染まっていく。

上にクラックが開き、そこから赤い果実が出て幽雅に被さる。

その手に持つアームズウエポンはエナジー系ロツクシード共通の

ソニックアロー。鎧は赤く、斬月・真とは違い西洋風の鎧で身を包んでいる。

——機械生命体の力で蘇った伯爵、仮面ライダーデューク ドラゴンエナジーアームズ。

「さて……いくぞー！」

デュークの姿が消える。いや、本来なら赤い軌道を残しながらの高速移動だが、幽雅の製作したゲネシスドライバーはデュークの場合のみ、光学迷彩が起動すること出来る。

「ッ！」

「フシヤアッ！」

デュークはナスカの背後に回り込み斬撃。そしてスミロドンの背中にエネルギー矢を当てる。

立ち直った2体は共に高速移動で駆け回る。青い軌道と茶色い軌道、そして本来なら見える赤い軌道が縦横無尽に駆け回る。

デュークの高速移動はナスカとスミロドンにも劣らない。この中で唯一遠距離装備を持っているデュークは一定のタイミングで各々にエネルギー矢を放つ。

ナスカとスミロドンは自らの得物で迎え撃つが、今回は違った。

デュークのエネルギー矢の攻撃がナスカにしか来ていない。スミロドンはこれを怪訝に思うも、矢が放たれる場所まで高速移動し、その爪をたてようとする。

スミロドンが爪を振りかぶると、
ザシュ。

「フシヤアアアアアッ！」

《LOCK ON》

《ドラゴンフルーツエナジー》

スミロドンは空いた胴体をアークリムで斬りつけられ後ろに仰け反る。デュークはすぐにロックシードをソニックアローに嵌める。

デュークは高速移動でスミロドンの腹にソニックアローを押し付

ける。スミロドンはデュークを爪で叩いて引き剥がそうとするも、デュークは引かない。

「喰らえ」

ソニックアローから赤いドラゴンの形をしたエネルギーが放たれる。放たれたエネルギー《ソニックボレー》はスミロドンの腹部にあるガイアドライバーに当たり、スミロドンは壁に叩きつけられ、爆散する。

デュークはすぐ後ろに迫っていたナスカの剣をアークリムで防ぎ、腹を蹴って弾く。デュークはソニックアローで矢を撃ちながら追撃するも、ナスカは高速移動で駆け回り、デュークの背後をとる。

背後を取られたデュークは高速移動で避けようとするが、ナスカの剣がデュークの背中を切り裂き、火花を散らす。

デュークは前へ転がり、振り返るも既にナスカの背中はなく、ナスカは高速移動でデュークの背後を斬りつけた。デュークは必死に避けようとするが、ナスカの高速移動をひきいた戦闘に翻弄され続ける。

ナスカがトドメを刺そうと正面に高速移動をしてデュークを斬ろうとする。それに対してデュークは避けずにナスカの腰へ抱きつく。デュークはナスカの肩を掴んで無理矢理後ろへと引き剥がす。ナスカは引き剥がすと同時に攻撃を仕掛けようとする。

だがそれが勝敗を分けた。

後方へと背中向きに飛ばされたデュークは既に攻撃へと映っていた。

《LOCK ON》

デュークのゲネシスドライバーには確かにドラゴンフルーツエナジーロックシールドが嵌っている。ナスカは怪訝に思うが、既に仕掛けた攻撃は止められない。

《メロンエナジー》

「終わりだ」

デュークがソニックアローに嵌めたのはメロンエナジーロックシード。幽雅の作ったソニックアローは変身しているロックシードを使って必殺技を放った方が威力は高い。逆に必殺技を使う時に別のロックシードを使うと威力は低い。

だが近距離ならば、問題は無い。

ナスカは既に剣を振りかぶっており、攻撃は止められない。デュークの持つソニックアローから《ソニックボレー》が放たれる。《ソニックボレー》はナスカのガイアドライバーに直撃し、ナスカは内側から爆散する。

ナスカの爆発で吹き飛ばされるデューク。壁に叩きつけられ漸く止まることのできたデュークは変身を解除する。

幽雅の体には所々傷があり、背中血が滲んでいた。

幽雅は疲れた足取りでナスカの爆散した所へと歩く。そして爆発の中心点に落ちていたものを拾い上げる。

「ガイアメモリ・・・によく似た模造品か」

幽雅はNと刻まれたメモリを懐に入れ、スミロドンが爆発した所まで行き、そこにもあったSと刻まれたメモリを懐に入れる。

「下か」

《ZONE》

幽雅は下からの音を聞いて、ゾーンメモリを使い下に移動した。

プレシア

時の庭園最下部には、今回の黒幕であり時の庭園の主であるプレシアと娘のアリシア、そして管理局の執行官であるクロノと海鳴市の魔術師、当麻とアリシアのクローンであるフェイトと使い魔のアルフがいた。

プレシアの姿はトリガードーパントで、その右腕の銃器はクロノ達に向けられている。

クロノと当麻は負傷しており、頭から血を流している。

「世界は、いつだってこんなはずじゃないことばかりだよ！ずっと昔から、いつだって誰だってそうなんだ！」

クロノがプレシアに叫ぶ。プレシアの右腕はピクリとも動かずに、未だにクロノ達の方を向いている。

「こんな現実から逃げるか、立ち向かうかは個人の自由だ。だけど自分の勝手な悲しみに無関係な人間を巻き込んでいい権利はどこの誰にもありはしない！」

「もう終わりにしろ！全て終わったんだよ！プレシア！」

当麻が地面に膝をつきながら叫ぶ。当麻は通路を塞ぐ傀儡兵との戦闘で無茶な投影を繰り返し、既にその体は限界が来ている。

その証拠に、当麻の手に握られている干将・莫耶は剣先が欠け、罅が入っている。

「黙れ!!」

プレシアが右腕のライフルを雷撃を纏った銃弾を撃つが、撃つと同時に体が前向きに倒れ、銃弾はあらぬ方向へとんでいく。

倒れかけたプレシアの体から青いメモリ——トリガードーメモリが排出され、同時にプレシアが血を吐く。

「母さん」

「何しに来たの。消えなさい。もう貴方に用はないわ」

フェイトがプレシアに駆け寄ろうとするが、プレシアの言葉でフェイトは止まる。

「あなたに言いたいことがあつてきました」

フェイトが止まり、話し出す。クロノ、当麻、アルフの三人はフェイトを見守っている。

「私は、アリシア・テストロツサではありません。あなたの作ったただの人形なのかも知れません」

フェイトの言葉にプレシアは目を見開く。あそこまで拒絶したのに、何故まだ自分に執着するのか、と。

「だけど、私は、フェイト・テストロツサは、あなたに生み出してもらって、育ててもらったあなたの娘です」

「だから何？今更あなたを娘だと思えとでも？」

プレシアはフェイトを否定し続ける。フェイトは自分の求めているものではない。だがプレシアはフェイトを受け入れようとしている。だが、受け入れてしまえばプレシアは大切な何かを失うと思っている。

だからこそ、否定。

「あなたがそれを望むなら、私は世界中の誰からも、どんな出来事からもあなたを守る。私が、あなたの娘だからじゃない。あなたが、私の母さんだから」

フェイトの真摯な目がプレシアへと向けられる。嘘偽りない本物の感情。

「くだらないわ」

だがプレシアは切り捨てる。自分の娘はアリシアだけだと、心の中で永遠と自分に言い聞かせ続ける。

フェイトの顔が崩れる。

そしてプレシアが何らかの魔法を発動させると、時の庭園全体が揺れる。

そしてアースラにいるオペレーターのエイミーからクロノに通信が入る。

『クロノ君！プレシアの魔法で時の庭園が崩れ始めてる！急いで脱出して！』

「くっ！分かった。当麻、アルフ、フェイト、時の庭園が崩れる！撤退だ！」

クロノが全員に呼びかけるが、フェイトは動かない。否、動けない。フェイトの視界には、今にも崩壊しそうな足場にいるプレシアの姿。

「私は向かう。アルハザードへ。そしてすべてを取り戻す。過去も、未来も。たった一つの幸運も!!」

「母さん!!」

プレシアの足場が崩れ、プレシアが果てのない底へ落下していく。フェイトは追いかけてしようとするが、アルフがフェイトを止める。

だが次の瞬間、フェイトの横を『白』が通り抜けた。

「私は向かう。アルハザードへ。そしてすべてを取り戻す。過去も、未来も。たった一つの幸運も!!」

ゾーンメモリで最下層に移動し、柱の陰で全員の会話を盗み聞きしていた幽雅は、盗み聞きしている途中に付けた、手の形をしたドライバーを起動させ、走り出す。

《シャバドウビタッチヘンシーン シャバドウビタッチヘンシーン》

《チェンジ now》

幽雅が現れた魔法陣を通り抜けると、顔にオレンジ色の宝石が嵌められ、全身を白いローブで隠しているライダーに変わる。

——数多の魔法を操りし、絶望と希望を見続けるライダー、仮面ライダーワイズマン。

ワイズマンはアルフに止められているフェイトの横を走り抜け、指に指輪を嵌めてそのままドライバーに翳す。

《チェイン now》

手を翳すと、ドライバーから機械音声の流れ、プレシアとアリシアの入ったポッドの周りに魔法陣が出現し、中心から白い鎖が飛び出し、プレシアとアリシアに繋がる。

「ッ!?!」

(この穴は重力が普段より強いのか!? チッ!このままでは鎖が千切れ

る……!!)

鎖で捕まえると、予想以上の力があることが分かったワイズマンは舌打ちする。今使えるワイズマンの全魔力を注ぎ込んでも帰り道にテレポートするだけの魔力が無くなる。かと言ってゾーンメモリだと、人間は一人しか転移できない。

「……しなさい」

「ん？」

下からプレシアの声がしたので少し目を向ける。鎖で囚われているプレシアは俯いてなにか呟いている。

「離せえ!!私とアリシアの旅の邪魔をするなあッ!」

「何だ?!」

プレシアが叫ぶとプレシアの周りから雷撃が迸り、維持だけに魔力を込めていた鎖を粉々に破壊する。

ワイズマンは予想外の行動に後ろへと倒れる。

「もう無理か」

ワイズマンはプレシアの姿が見えなくなってきたので、自らも撤退することにした。

「ゲネシスドライバーの運用実験とこいつを回収できたのが救いか」

ワイズマンは地面に落ちているトリガーメモリを取り、ローブの中に入れる。

「さらばだ。そしてありがとう。俺に戦いの場を与えてくれて」

《テレポート now》

ワイズマンは新たに指輪を指にはめてドライバーに翳す。白い魔法陣がワイズマンの体を通ると、ワイズマンはどこにもいなかった。

直後、ワイズマンがいた場所は爆炎に飲み込まれた。

「ハア……ハア……ハア……ッ!」

幽雅はテレポトリングで幽雅が現在居候中の八神家の玄関まで来ていた。変身は解け、幽雅の顔や体には無数の切り傷があった。

変身している時は特に痛みは感じなかったが、解除するとすぐに傷口が痛み出す。

あらかじめ開けておいた窓からバレないように部屋に入ろうとする。体格が体格なので土台を用意して鍵のかかかっていない窓を静かに開ける。

足音を立てずにコツソリと侵入し、ベルトを元の位置に戻す。着ていたコートを壁に掛け、上着を脱ぎ半裸になる。

姿鏡の前で背中中の傷を確認し、腕や顔に付いている傷も見ておく。どれもそこまで深くはない傷だったので今すぐ治すことにし、ブレイクガンナーとマッドドクターを取り出す。

いつも通りマッドドクターをブレイクガンナーにセットし、マズルを押し。

《Tune MAD doctor》

まず一番痛む背中中の傷から治療しようと思中へと手を伸ばすが……

「その体どうしたん!」

たまたまなのだろうか、家主であるはやてが扉を開けて幽雅の背中を見てしまった。幽雅の背中は何かに斬りつけられたような跡がかなり付いており、その痛々しさがよく伝わってくる。

「悪いが、少し手伝ってくれないか?」

幽雅は手の届きにくい背中を指さす。はやては救急車やら手当やらであたふたしている。

「こいつのマズル……ここの部分を傷口に押し当てて引き金を引いてくれ」

幽雅ははやてに無理矢理ブレイクガンナーを握らせる。はやては幽雅の事を信じてブレイクガンナーの引き金を引いた。

ブレイクガンナーから幽雅の傷口へとエネルギーが移動する。エネルギーはスパークを纏って幽雅の傷口へと侵入し、傷ついた体を修復していく。

本来なら叫び出すほどの痛みが代償としてあるのだが、叫ぶとはやてに迷惑がかかるので、幽雅は必死に歯を食いしばって叫ぶのを堪え

ていた。

全ての傷の修復が終わり、はやては幽雅の体からブレイクガンナーを離す。はやての手は少し痺れており、ブレイクガンナーを両手で持っているので精一杯だった。

幽雅は汗まみれで上半身にあったはずの傷は全て修復されており、今は腕を回して体の調子を確認している。

「幽雅、何があったん？」

背中を向けている幽雅に問いかける。幽雅の言っていた野暮用。それは幽雅に怪我を追わせるほどの事態。今ではいなくてはいけない存在となっている幽雅をはやては失いたくなかった。

別に幽雅がやっていることを止めるつもりは無いが、何をしているのかは知っておきたかった。

正座させられて話すこと一時間。

幽雅は面倒事について（魔法とライダーに関する事を除いた情報）話していた。拾った少女がとある目的を持ってそれを裏で手伝っていたこと。

自分のクラスの男女3人がそれに関わっていること。

幽雅はブレイクガンナーの事については銃になったりメリケンサックになる便利な物と説明した。

はやてはまだ疑いの眼差しを向けているが、幽雅の必死の頼みにより解散となった。

戦後

時の庭園での戦闘を終えた幽雅は普段通りに学校に来ていた。はやての家にははやての頼みでまだ居候している。はやての家から学校までは遠く、歩いていこうと思える距離ではない。

だから幽雅は学校近くのあまり人目につかない駐車場までチェイスの姿になり、ネクストライドロンで学校まで来ていた。

幽雅はいつも通り授業は普通に受けており、なのはが居なくても何の影響も受けなかった。アリサやすずかは親友がいなくていつもよりは大人しくしている。

唯一当麻だけが学校に来ているが、これについても当麻からの接触が無ければ幽雅にとつてはいつでもよかった。

幽雅にとつてはいつもと変わらない日常。

誰にも話しかけられず、必要なことだけ話せばいい単純作業。それ自体が退屈だと思いうわけでもない、そうして当たり前だという意識。

だが、そんな日常は一度打ち切られる。

「幽雅、ちょっと話したいことがあるから屋上に来てくれないかな？」
微笑を浮かべて『呼び捨て』『名前を呼び』『友達のように』話しかけてくる当麻をうっとおしく思いながらも、幽雅は屋上へ向かった。

屋上には色とりどりの花が咲いている。

幽雅と当麻の間に花壇が置いてあり、二人を隔てている。

二人の距離はおよそ6 m。

「二日後に、フェイトが時空管理局に連行される」
「でっ。」

当麻が伝えたことを幽雅は興味無さそうに返す。所詮幽雅にとってフェイトは珍しく世話を焼いた程度の人間。幽雅はそんな浅い関係は気にしない。

「でって、いいのかよ!?——ッ！」

当麻が幽雅がブレイクガンナーをこちらに向けたのを見て言葉を切る。幽雅はトリガーに指をかけてはいないが、その目は容赦していない。

「黙れよ正義の味方。お前だって気付いてるんだろ？プレシア・テスタロツサにガイアメモリを渡したのが誰かを」

幽雅は反対の手に二本のガイアメモリを持つ。一本はプレシアが使っていたもので、もう一本は禍々しいデザインのNと刻まれたガイアメモリ。

《NASCCA》

幽雅が一本のガイアウイスパーを鳴らす。

当麻は干将・莫耶を投影して構える。

「これは時の庭園に現れたナスカドーパントを倒した時に残ったものだ。変身能力はないが、記憶だけなら復元した」

「時の庭園で？」

何故そんなことが、と当麻が言おうとするが幽雅が再度口を開く。

「これからも怪人共が襲ってくるはずだ。そして今回現れたドーパントは最初俺ではなく高町なのはとフェイトを狙っていた」

「どうしてあの二人が？」

「それ位は自分で考えろ。だがこれだけは言っておく。怪人共に手を出すな。アレらはすべて俺の敵だ」

そう言って幽雅はブレイクガンナーとガイアメモリを仕舞う。当麻も干将・莫耶を消して警戒を解く。

幽雅はそのまま何も言わずに教室へと戻って言った。

放課後になり、幽雅は家に帰ってから海鳴にある公園に来ていた。

この公園は幽雅が初めてフェイトと出会った場所だ。

（何故俺はここに来た？もうフェイトに未練などない。なら何が理由だ？感傷に浸っているのか？）

幽雅はベンチに座り考え込む。その時、幽雅は公園と外が隔離された感覚になった。

（結果・・・誰か——後ろかッ！）

幽雅は気配を感じてすぐにベンチから前へ転がる。次の瞬間、座っていたベンチが何者かに破壊された。

「ドーパントの次はゾディアーツか」

幽雅が振り向くと視界には肌色と鋼色のサソリのような化物がいた。化物の体には星座のサソリを表した点が身体中に記されている。背中にはサソリのような尻尾のようなものがついている。

「スコープオンゾディアーツか。リブラ辺りが出てくるかと思ったんだがな」

幽雅は後ろに下がりながらメテオドライバーを腰にはめ、メテオスイッチを取り出す。

《Meteor ready?》

「変身」

幽雅の上空から青い光が降り、幽雅の姿が変わる。

「行くぞ」

幽雅———メテオは拳を構えてスコープオンへと飛び出す。スコープオンも両腕の鉤爪を構えファイティングポーズを取り、迎撃してくる。

「ハアッ！」

メテオはパンチと見せかけて蹴りを叩き込む。スコープオンは少したじろぐが、すぐに反撃してくる。スコープオンの鉤爪をメテオは両腕でいなす。

右、左、下、左と迫り来る鉤爪を正確に流し、少しづつ攻撃を与えていく。

「フウっ！」

「チイっ！」

スコープオンは状況に苛立ったのか尻尾を振り回しメテオから距離をとろうとする。メテオは突然のことに反応が遅れ、躲しきれず左腕でガードしてダメージを軽減する。

「そういえばそんなのがあったな。だが所詮は中距離だ」

《Saturn ready?》

メテオは右腕についているメテオギャラクシーのスイッチの一つを押す。

《OK Saturn》

そして端に付いている指紋認証の部分に指を乗せると、メテオの右

腕に土星が現れる。

「ハアッ！」

メテオは右腕を前に突き出し、土星に付いているリングを飛ばす。リングは一つではなく何発も連射されていく。

スコープピオンは両腕を盾にしてダメージを減らそうとするが、リングは確実にメテオを勝利へと近づけている。

メテオはリングを飛ばすのをやめ、スコープピオンに急接近していく。スコープピオンも立ち直りすぐに迎撃しようとする。

「フウっ！」

「同じ手は食うか」

スコープピオンが尻尾を振るうが、メテオは滑り込んで体勢を低くし、スコープピオンの懐まで潜り込んでいく。

スコープピオンは蹴りでメテオを飛ばそうとするが、メテオはスコープピオンの足を掴みスコープピオンの体を踏み台にして空中に跳び上がる。

《Jupiter ready?》

《OK Jupiter》

メテオは空中でさらにメテオギヤラクシーを操作し、右腕に大質量の木星をもした巨大なハンマーを作り出す。

メテオはハンマー——ジュピターハンマーで上からスコープオンを押し潰す。

反応が遅れたスコープピオンは逃げようとするが間に合わず、ジュピターハンマーに押しつぶされる。

「終いだ」

倒れ付すスコープピオンを見ながら、メテオはドライバーに付いているメテオスイッチをメテオギヤラクシーに取り付ける。

《LIMITBREAK》

《OK》

「フウ………オラアっ！」

スコープピオンの体に青いエネルギーを纏った右の拳を放ち、スコープピオンの体を浮かす。メテオはそのまま右の拳だけでスコープピオン

に何度も攻撃を加えていく。

「オー！オー！オー！オー！」

空中で抵抗出来ずにスコープイオンはメテオの『スターライトシャワー』を喰らっていく。

「オーアッ!!」

メテオが放った最後の一撃はスコープイオンの体を貫通し、スコープオンを吹き飛ばした。吹き飛ばされたスコープイオンはあえなく爆散し、その場には黒煙だけが残った。

メテオは最後まで見ないで立ち去ろうとしたが、ここで気付いた。まだ結界が解除されていないことに。

「まさか——グウッ！」

メテオがとつさに振り返ると、目の前に肌色の巨大な尻尾がメテオの体を吹き飛ばした。メテオは地面に転がり、15 m位転がり、ようやく勢いが止まり、すぐさま背後に跳び上がると、直後にメテオのいた場所に巨大な棘が振り下ろされた。

「『超新星』まで再現していたとはな」

メテオは煙の奥から覗く尻尾の来た位置を見据える。

そこには下半身がサソリとなり巨大化されたスコープイオンゾディアーツがいた。

「こいつを使う予定はしばらくなかったんだが、しょうがないから使ってやるよ」

メテオはこの場を唯一切り抜けられる切り札、巨大なスイッチを取り出した。

流星の嵐

前回のあらすじ（今回のみ）

幽雅は学校で当麻から数日後にフェイトが時空管理局に連行されることを聞く。

幽雅はフェイトと初めてあつた公園にいた所をスコープピオンゾディアーツに襲われる。

スコープピオンゾディアーツを倒した幽雅の目の前に、超新星を使ったスコープピオン・ノヴァが現れた。

「まだしばらくは使うつもりはなかったが……使うか」

メテオは現在、最悪の状況に追い込まれている。最初のスコープピオンゾディアーツは難なく倒したが、超新星を使ったスコープピオン・ノヴァの前では手も足も出なかった。

それもそのはず。

まず現在のスコープピオンとメテオは体格差があまりにも違いすぎる。そのためスコープピオンの体に攻撃が届かない。

二つ目は攻撃範囲。スコープピオンは尻尾を使うことで攻撃範囲が格段に広がるが、メテオは近距離武器がほとんどなので近づかなければ意味が無い。

メテオはこの場を逆転するアイテムを持っている。だがそれはまだ使う予定はなかったもの。

だが相手が超新星を使ったスコープピオンゾディアーツなら使うしかこの場を切り抜けることは出来ない。

メテオスイッチよりも遥かに大きな、クリアブルーとクリアイエローのスイッチ、メテオストームスイッチを取りだす。同時に、刺さっていたメテオスイッチを抜き、代わりにメテオストームスイッチをさす。

《Meteor storm》

《Meteor on ready?》

「さて、嵐を呼ぼう・・・変身!」

メテオストームスイッチについている風車のような部分を回す。メテオの体が黄色いエネルギーへと包まれ、エネルギーが晴れると新たな姿を顕にする。

ライダースーツを青く染め、流星をかたどっていた仮面は黄色く、嵐のような形になっている。

——嵐を呼ぶ仮面ライダー、仮面ライダーメテオストーム

「いくぞ・・・」

メテオは新たな武器、メテオストームシャフトを構え、スコープピオンの周りを走り出す。スコープピオンは巨体を少しづつ回転させながらメテオを追いかける。

「こちらばかり見てるなよ。後ろとか見ないと痛い目を見るぞ」

《power daiser》

スコープピオンの背後に灰色のオーラが出現し、そこから人型の黄色い3mほどの機械、パワーダイザーが現れ、スコープピオンに突撃する。

スコープピオンは後ろから迫ってきたパワーダイザーに尻尾の一撃を加えようとするが、パワーダイザーはその巨体から信じられないジャンプ力で、尻尾を飛び越えてスコープピオンに掴みかかる。

「ハアッ!」

スコープピオンがパワーダイザーを意識したことにより隙が生まれたので、すかさずメテオがストームシャフトで殴り掛かる。シャフトの先端からコズミックエナジーが流星のように軌道を描きながら、スコープピオンの足に当たる。

一撃では大した威力にはならないが、メテオはストームシャフトの両端を使い、スコープピオンの至る所に叩きつける。スコープピオンが業を煮やしたのか、掴んでいたパワーダイザーを投げ飛ばし、メテオのいる位置に何度も足を叩きつける。

メテオは前に転がり避けてスコープピオンの下に潜り込み、ストーム

シャフトを棒投げの要領で投げる。ストームシャフトはスコープオンの体にあたり、ヒビを創り落下する。

メテオは落ちてくるストームシャフトを回収しスコープオンの下から退避。スコープオンはメテオを追おうとするが、戻ってきたパワーダイザーによって止められる。

が、

バキリ。

乾いた音が響き、パワーダイザーの右腕がスコープオンの爪によりむしり取られる。片腕となりバランスを崩したパワーダイザーは更にスコープオンの爪の攻撃を喰らい、残った左腕も無惨に破壊された。

「クソ」

メテオが悪態をつくるとパワーダイザーに来た時と同じように灰色のオーロラが遠り、パワーダイザーを飲み込む。

スコープオンはメテオに向き直り、両腕を広げで自分の優位性を示してくる。メテオはストームシャフトを構えジリジリと距離を広げていく。

スコープオンがメテオに向かって走り出す。メテオは右に回り回避するが、迫ってきたスコープオンの右爪を確認して、ストームシャフトで受け止める。体格や余力の差で少しづつメテオが押されていく。

メテオのいる地面は陥没し、蜘蛛の巣のようなヒビ割れが広がっていく。

「グウッ！——ラァァァァァッ！」

気合一閃。スコープオンの爪を押し返し、飛来する尻尾を地面にしゃがみこみ避ける。避けた先に来る足による踏み潰しをストームシャフトで弾き、更に跳ぶ。

「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」

息を整え、相手の出方を見る。今は完全にスコープオンの方にペー
スが傾いている。スコープオンは無人で体力という概念があるかど
うかも分からず、メテオは子供に戻ったことでスタミナが減り、有象
無象ならまだしも強大な敵との長時間の戦闘は不可能。

（ハア・・・ハア・・・もうこれ以上の戦闘は不可能だ。上手くいくか
はわからないが、ここで決めないと本気でやばい！）

メテオはベルトに刺さっているメテオストームスイッチを抜く。
ストームシャフトの端に付いているスイッチホルダーへとスイッチ
を差し込む。

《LIMITBREAK!》

（正真正銘、最後の一撃だ！）

「メテオストームパニツシャアアッ！」

ストームシャフトを振りワインダーを抜き、ストームシャフトを一
回転して振ると、メテオストームスイッチからエネルギー増幅独楽、
ストームトツパーが発射される。

ストームトツパーは流星の様な速度でスコープオンに迫り、その巨
体を貫いていく。ストームトツパーは何度も方向を急転換させて足
や腕、尻尾を切り落としていく。

スコープオンは抵抗しようとするが、その速度についていけずに、
抵抗できずに体を破壊される。縦横無尽に駆け巡るストームトツ
パーはスコープオンの胸を貫き、メテオストームスイッチへと戻っ
た。

スコープオンは超新星が解除され、人型に戻り地面に倒れ伏す。

メテオはまだスコープオンが消える予兆がないことを確認し、トド
メを刺すために行動する。

ストームシャフトを投げ捨てベルトの真ん中についている球体を
回す。

「終わりにしよう」

《Meteor LIMITBREAK》

スコープオンが貫かれた胸を抑えて立ち上がると同時にメテオも
走りだす。メテオは飛び上がり、青いエネルギーを右足に纏いスコ

ピオンが抑えている胸に向けて必殺のキックを加える。

スコープピオンは両手で胸の傷を庇おうとするが、メテオの必殺技《メテオストライク》がスコープピオンの両腕を粉碎して胸に命中する。スコープピオンは息付く間もなく爆散し、破片すら残さずに消える。そしてスコープピオンがいた位置には赤いスイッチだけが取り残されたが、少し経つとブルックホールのようなものが発生してスイッチを呑み込んだ。

「ゾディアーツならまだしも、『超新星』まで再現していたとはな。これがライダーの存在しない世界に、ライダーが来た場合の現象か」メテオは変身を解除し、幽雅は周りを見渡し結界が消えたのを確認する。

「地面が穴だらけだ。隕石でも降ってきたと思われるんじゃないのか？ バレる前に退散しておくか」

幽雅はどこから来たライドチェイサーに乗って公園を後にした。後日、公園に隕石が誰にも知られずに降ってきたのだと噂になった。

数日後

フェイト、なのは、当麻、美結、ユーノはフェイトの見送りのために集まっていた。フェイトはこれから時空管理局で今回の事件に関しての裁判があるため、一時管理局に身を任せることになった。なのはとフェイトがお互いのリボンを交換し合い、名前を呼び合う。

そしてフェイトがアースラに移送される時、フェイトの目に一台のミニカーがとまった。そのミニカーは幽雅が時の庭園に行くためにフェイトに渡したシフトカー。

「クロノ、もう少しだけ待って」

「フェイト!?!」

突然走ってどこかへといったフェイトに呆然とする一同。唯一当麻だけが、フェイトがどこへ行ったのかを納得した顔をしている。

フェイトは進んでいくシフトカーに駆け足でついて行く。やがて

シフトカーは最近隕石騒ぎが起きた公園で止まり、主の元へと向かう。

「来てくれたんだね。幽雅」

フェイトの視線の先にはシフトカーを肩に乗せた幽雅。幽雅は公園に来るまで乗ってきたのであろうローズアタツカーをロックシードに戻し、フェイトに視線を向ける。

「衛宮当麻に言われたからな。どうやら俺はお節介焼きだったみたいだ」

幽雅の言い分にフェイトが口元を抑えてクスクスと笑う。

「そのリボン、高町のか？」

幽雅がフェイトの手にあるリボンについて問う。フェイトは首を倒し肯定する。

「そうか」

幽雅はフェイトの手からピンクのリボンを取り、フェイトに近づき、リボンを結び始める。丁寧に髪に触れ、フェイトの髪型をいつもの通りのツインテールにしていく。

「完成だ。よく似合っている」

「ありがとう、幽雅」

「・・・ッ！」

フェイトの笑顔に幽雅の心は少しだけ揺れるが、いつも通りの冷静さを取り戻し、話を続ける。

「裁判が終われば、またここにこれるよね？」

「ああ」

「また会えるよね？」

「善処する」

「善処するじゃなくて、絶対に」

「わかった。絶対にまた会おう」

幽雅の答えに満足したフェイトが幽雅に顔を近づける。幽雅は突然顔を近づけてきたフェイトが何をするつもりか分からずに、反応が遅れてしまった。

「チュ」

「——ッ！」

フェイトのキスによる不意打ち。狙ったのかキスした場所が唇。つまりマウスとウマウス。残念な事に幽雅にキスした経験などなく、これが五回も繰り返してきた人生の初キスとなった。

「私の初めて、もらってくれてありがとうね」

「もう行け。全員待ってるぞ？」

「そうだね。じゃあまた」

そう言っつてフェイトは来た道を引き返していく。幽雅は最後までフェイトの背中を見届け、ローズアタッカーを出して自分のいるべき場所へ帰っていった。

その頃はやては

「何か嫌な予感がする——！幽雅に誰か他の女が近づいたのかも——！」

幽雅の知らない内に少し病んでいた。

彼女の話されるのは、また後日。

闇の書

幽雅の朝は早い。

朝5時にはやてを起こさないように洗面所へ行き顔を洗う。その後動きやすい服に着替え一時間ほど全速力で走る。

走り終えてストレッチを済ますと朝食の準備。前までははやてが作っていたが、幽雅は現在居候の身。偶に家に帰って掃除するが、基本的に八神家に住んでいる。

学校まではガイアメモリを使いチェイサーの姿になり、バイクかネクストライドロンで学校近くの駐車場まで行く。

それからはいつも通りに授業を受けて、来た時と同じ方法で帰る。いつもなら直行で八神家へと向かうのだが、今日だけは色々などころへと寄っていった。今日のはやてが図書館に遅くまで行くと聞いていたので、スーパーへ向かい必要な食材を買う。

ドンキオーテ等でクラッカー等のパーティーグッズを買い急いで帰宅。

はやてが帰ってこない内に買ってきた食材でいつもよりも豪華に調理。調理の合間に部屋の飾り付け。

五回も転生していれば自然とこういったことには力が入り、一人で大抵の事はできるようになった。

全ての用意が終わると、はやてを待つ。待っている間にシフトカーを磨いたり、ゲネシスドライバーの調整をしたりして待つ。

『ただいまー』

はやての声があるとすぐに道具を仕舞い、はやてのことを迎える。

「おかえり。ご飯の準備は出来ている」

「ホンマ!?!」

「ああ。だから早く手を洗ってこい」

はやてが手を洗いに行ったのを見計らって準備していたものを全て出す。

今まで生きてきた中で培った気配察知能力を使い、扉にはやてが近付いてきたのを察知して、所定の位置につく。

はやてがドアノブを下げる。ドアノブを下げきると扉を押す。車椅子でリビングにゆっくりと入ってくる。幽雅が仕掛けた『アレ』は扉の脇やソファ、各所に隠しており幽雅の持っているスイッチを押すことで自動的に起動するように仕掛けてある。

はやてが部屋に入ってくる。幽雅は反射的にスイッチを押す。

パパパパパン!!!

「誕生日おめでとうだ。はやて」

突然の事で呆然としているはやてを置いて幽雅がいつも通りの無表情で言う。

「どうした？そんな顔をして？」

幽雅が怪訝そうに問う。よく見るとはやての目は少し涙が溜まっている。

「す、すまない。何か気に触ることもしたのだろうか？」

はやてを見て幽雅が慌てて弁解しようとする。はやてはやがて涙を流し始める。

「ち、違うんや。こんなふうに祝われたのが初めてやから・・・」

幽雅は思い出す。はやての両親ははやてがまだ幼い頃になくなっている。そしてはやては生まれつき足が悪く学校にも行けていない。

必然的に歳の近い友人がおらず、誰からも祝われることがない。

「そうか」

そう言って幽雅ははやての頭を撫でる。それからはやては子供のように泣きじやくり、結局夕飯を食べ始めたのは20分後だった。

八神家、幽雅の部屋。

時刻はもうすぐ日付けが変わる時間。幽雅は最近作り始めた一つのアइटムの作製に熱を入れている。

作製の為のデータは揃っているが、何処をどのように調整すればいいのか分からないため、手当たり次第に弄り、何度を作り直しをしている。

そして今回も、

「またダメか。どうやってもエネルギーを抑えられない。改めて思う

が、我望と江本、歌星親子は天才すぎる」

幽雅は耐衝撃ケースに入っている物を取り出し、失敗と書かれた箱に投げる。

「もうすぐ0時。下手なこととしてはやての事を起こしたくないし、後は調整だけでいいか」

幽雅はブレイクガンナーと機材を用意し、細かな調整を始めようとする。

(はやて以外の人の気配がする)

幽雅は泥棒か何かだと思うが、それはありえないと判断する。はやての部屋は二階にある。玄関や窓から入ってくるにしても必ず階段を踏む音がするはずだ。

だが幽雅は全く聞こえなかった。

(考えられるのは魔法による転移。だが何故ここに？俺がここにいるなんて教えるようなハマはしてないが)

幽雅はブレイクガンナーを片手に音をたてずに、静かに扉を開ける。

(クリア。まさか既に部屋の中か!?)

幽雅は音をたてずにはやての部屋の前まで行く。完全に気配を殺した歩法。

『誰だ!?!』

幽雅が扉に手をかけると内側から扉が蹴破られる。幽雅は声がした瞬間に横へ転がり、迫り来る扉を回避する。

(女だど?)

幽雅は部屋から出てきた人物——剣を持った女性に向けてブレイクガンナーを撃つ。女性は持っている剣で的確に銃弾を弾く。

その間に女性の後ろにいた、はやてと同じ位の身長少女がハンマーを持って迫る。

(二人目！それも子供！)

《Break》

幽雅はブレイクガンナーをブレイクモードに切り替え、降りかかるハンマーを殴り、受け止める。

「グラーフを受け止めたであつ?」

「オラアッ!」

驚愕している少女を無視して、力技で弾く。その隙に後ろに後退しようとするが、誰かに足を掴まれた感触に思わず下を見る。

(手!?魔法か!?)

何も無い空間から緑色の魔力を発して腕が伸びている。その腕は幽雅の足を掴んでいる。

「もういつちよオ!」

ハンマーを持った少女が再度接近してくる。幽雅は落ち着いて迎撃に映る。

掴まれた足を軸に、足を掴んでいる手を片足で蹴りその場で回転する。迫り来るハンマーに脚力+勢いで蹴り返す。

「今度は足い!」

弾かれた少女は後ろへとんで着地する。これまでの所要時間12秒。狭い廊下で行われたこの戦闘は床や壁を大いに破壊した。

「ちよつといきなり何してるんや!」

破壊された扉から出てきたのは車椅子に乗ったはやて。幽雅ははやての現在の無防備な状態に、少しだけ警戒を緩めた。

「ですが主ははやて、この怪しい少年がもし敵だったら」

「言い訳はいいわ!それと幽雅!どうしてこんなことになったのか説明してもらおうから!」

はやての剣幕に押されその場の全員が矛を収める。幽雅もブレイクガンナーを仕舞い、はやての部屋に向かう。

部屋にははやてと先程戦った女性と少女、そして片手を赤らめている、先程幽雅が手を蹴った女性と、犬耳尻尾というある意味マニアックな姿をした、筋肉質な男性。これら4人が跪くかのように座っていた。

幽雅は扉があつた場所の横の壁に背中を預ける。

今宵の恐怖激が始まる。

監視者へ降りかかる災い

翌日

幽雅は学校を休み、八神家ではなく自分の家でベルトを弄っていた。

昨晚、はやての部屋に現れた四人の集団、ヴォルケンリッターと名乗る集団は、はやてが保有する闇の書と呼ばれる魔導書を媒介に召喚されている。はやての足が悪いのも闇の書の影響らしい。

ヴォルケンリッターは烈火の将シグナム、鉄槌の騎士ヴィータ、湖の騎士シャマル、盾の守護獣ザフィーラの4人。彼らははるか昔、ベルかと呼ばれる時代の騎士と呼ばれる者達のこと。

闇の書は全部で666ページあり、魔力で蒐集し、ページを増やすらしい。魔力の蒐集はリンカーコアを直接奪うらしい。

これだけ聞くと、幽雅は自分のことをはぐらかして八神家の居候をこれまでにして自分の家へと戻った。

はやては泣きそうな顔になり止めようとするが、幽雅はヴォルケンリッターがいるから大丈夫だ、と言ってネクストライドロンで家から出た。

そして現在。

幽雅は目の前にあるゲネシスドライバーの最終調整を終えていた。ドライバーの数値は最高レベルまで出されており、一番出力が高いドラゴンフルーツエナジーにも耐えられるまでになっていた。

更にはソニックアローの威力調整やアークリムの斬撃の上昇等の各種装備も見直していた。

そんな幽雅に一つの視線。

幽雅の家から数十m離れた場所から幽雅を見つめる一匹の猫。その猫は一ヶ月前に闇の書の主、八神はやての元に現れた幽雅のことを監視していた。

この猫の主は、はやてが闇の書の主であることを知っていた。だから闇の書が覚醒するまで、家の周りに結界を張り使い魔である猫を使って見守り続けていた。

(お父様にコイツも同じように監視しておけつて言われたけど・・・。何か作っているんだろうけど、ここからじゃよく見えない。魔導士というわけでもなさそうだし・・・)

猫——正確には猫に変身魔法で姿を変えているリーゼロッテは持ち前の身軽さを使って遠回り気味に幽雅の家に近づく。

だがリーゼロッテは知らなかった。自分が監視している相手が、歴戦の猛者であり、かつて全ライダーを相手に裏切りと闘争の中で頂点に立って戦っていたことを。

(い、いない!!少し目を離しただけなのに・・・!!)
「うし——ガッ!？」

突如リーゼロッテの背後に気配があつたので振り向くと、一瞬で地面に蹴り飛ばされる。五感に優れた猫でさえも感知することが出来なかった。

「動くな魔導士。動けば一撃で終わらせる」

蹴った本人——幽雅はブレイクガンナーを手に首をゴキリ、と鳴らしている。

「オマエが一ヶ月前から俺のことを監視していたのは知っていた。無論、八神家に結界が張られていることもな」

《Tune Justice hunter》

幽雅が銃口をリーゼロッテに向けながらブレイクガンナーにシフトカーをセットして、リーゼロッテに向けて引き金を引く。リーゼロッテは反射的に目を瞑るが、何の異常もない事に不思議に思い目を開くと、檻の中に捕まっていた。

(檻!いつの間に・・・!でもこれなら、転移魔法が——)

「転移は無駄だ。最近作り始めたAMS——アンチマジックシステムはリンカーコアの魔力の流れを阻害する。浮遊くらいなら問題は無いが、それ以外の魔法の行使は不可能だ」

幽雅の言葉にリーゼロッテは戦慄する。目の前の自分よりも幼い、弟子であるクロノと同じ位の少年は、魔導士を完全に無力化するシステムを作り上げたのだから。

この少年が相手では魔導士は、管理局は相手にすらならない。それ

を自分の感情よりも、第六感が言っていた。

「質問に答えろ。なぜ八神はやてを監視していた」

リーゼロッテは答えない。幽雅は何も答えないリーゼロッテを無情な瞳で見る。リーゼロッテは幽雅の目に恐怖した。なんだこの目は、こんな少年がこうも色の無い目を出来るのか、と。

「もう一度聞く。なぜ八神はやてを監視していた」

「……………」

尚も無言。幽雅はこのままではどうにもならないことを悟り、最終手段に出る。

《MEMORY》

幽雅は尋問用ガイアメモリ、メモリーメモリを取り出し、リーゼロッテの額に押し付ける。突如、リーゼロッテの額から緑色のエネルギーがメモリへと流れていく。

幽雅はエネルギーが流れが止まると、リーゼロッテの首を掴み、木に投げつける。その力はとても少年が出していいものではなかった。投げつけられたリーゼロッテは木にあたり地面に倒れ伏す。

幽雅はリーゼロッテを興味無さそうに一瞥し、家の中へと戻っていった。

「AMSは機能はしたが、やはりバッテリーの消耗が激しいな」

部屋に戻った幽雅はついさつき使ったAMSの稼働データを見ていた。AMSはこの世界に来て魔法のことを知った時から開発していたが、P・T・事件の時はまだ理論の組み立てが終わっておらず、今日ようやく稼働まで移すことが出来た。

だが足りない。魔力の波長、機能しないかもしれない魔法、外部からの衝撃、魔力量による発動の有無。この他にも沢山の要素が幽雅のことを悩ませる。

「それにしても……管理局中将、ギル・グレアムか……」

幽雅は先程吸い取った記憶の入ったメモリを手に遊ばせながら、猫の主人のことを考える。幽雅は猫を殺さなかつたので、既にギル・グレアムに自分のことは報告されているだろうと予測する。そして幽

雅の事を管理局で公開することも。

聞くからにブラックそうな所に幽雅のことが報告されれば、間違いなく捕獲作戦などを行うだろう。

「これ以上ネガティブなことを考えるのはやめよう」

思考を切り替える。幽雅はとりあえずAMSとその他のアイテムの制作に取り掛かった。

欲望に抗う仮面

八神家から離れて一週間。特にすることのない幽雅は、海鳴市でも有名なデパートまで来ていた。

別に一人で来た訳では無い。

「おーい！幽雅〜！」

車椅子をシャマルに押されて、はやてが来た。隣にはシグナムとヴィータもいる。

あれから、はやてが幽雅の事をシグナム等に話したので、いきなり襲われはせず、警戒だけされている。

「それで、今日はどうするんだ？」

「シグナム達の私服買いに来たんや」

ああ、と言つて幽雅は納得する。シグナム達の最初の服はとても今のご時世に外で着れるようなものではない。もし出歩いたら一発で職務質問されるだろう。

闇の書の中に都合良く服が入っているわけでもないので、わざわざ買いに来たということ。

ザフィーラは犬耳が目立つので家で留守番をしているらしい。

「ほな、行こっか」

はやてが先導して進んでいく。幽雅はあまり人の多いところが好きではなく、デパートには全くと言ついいほど行かない。服なんかも全て通販で買っている。

幽雅は知らなかった。女性の買い物は長く、精神を削ることを。

「・・・疲れた・・・」

幽雅はデパートのベンチで項垂れている。幽雅の横には沢山の服などが入った袋がいくつも置いてあり、その全てが幽雅によつて運ばれてきた。

これが子供の姿だったらできなかつたが、途中ではやて達に説明してから、人目のないところでチェイスとなり、運んできた。

幾ら日頃から鍛えている幽雅だろうと、両手いっぱい袋を持たさ

れて、それを何時間も続けていたら流石に腕が疲れてくる。そして幽雅の姿は季節外れの長袖長ズボン。

見るからに暑そうな服は、見た目通りに幽雅の体力を削っていた。

買った張本人達は正面の店で未だに何かを買おうとしている。何をかうかなど、幽雅は知る由もなかった。

「ん？どうした」

座っている幽雅の足元に一匹のミニカー、シフトネクストが走ってきた。幽雅はシフトネクストを拾い上げ、掌に載せる。シフトネクストは上を見るように伝えたい仕草をしてきたので、幽雅が上を見上げると、そこには耐雪のために強化されたガラスの天井があった。

否、そこには一体の灰色異形もいた。異形は幽雅を見つめている。まるで誘っているかのように。

「チッ。こんな日くらい休ませろよ」

幽雅は袋を全て置いて、周りの迷惑も考えずに全力で屋上へと上がっていった。

バァンツ！

ドアを殴り開けた幽雅は先ほど自分を見つめていた異形を探す。だが屋上には異形の姿がなく、周りを見渡してもその姿はなかった。(逃げられたか……。なら何のために姿を——上か!!)

幽雅は咄嗟に上から気配を感じると、その身を翻して降ってきたものを避ける。

降ってきたもの——異形は象のような顔に、ゴリラやサイなどの巨大な動物を混ぜ合わせたような姿をしている。その名も、欲望の怪人グリード、ガメル。

「ドーパント、ゾディアーツと来て——フツ！今度はグリードか」

ガメルの必殺の抱擁を、しゃがむことで回避する。愚鈍でスピードがないガメルは前へと躓き、空気清浄機に触れる。触られた空気清浄機は次の瞬間、灰色のメダルと化した。

幽雅は銀色のベルトを巻き、金色の携帯を取り出す。

《0・0・0》

《standing by》

「その能力も健在か。——変身」

《complete》

幽雅の身体に金色のラインが走り、そのボディが黒く染まっ
ていく。幽雅は久しぶりに使った仮面ライダーオーガの調子を、
掌を握ることで確かめる。

「よし、逝くぞ」

オーガの専用武器、オーガストランザーを右手に構え、ガメル
に向かって走り出す。ガメルはスピードを捨てた代わりに防
御と攻撃だけを強化し続けたグリード。

その防御力は弱っている状態で、仮面ライダーバース二人の
零距离砲撃でようやく倒せる硬さ。

スピードがあってもパワーがなければ意味が無いので、幽雅
も同じくパワー型のオーガを選択した。

オーガストランザーとガメルの爪がぶつかり合う。拮抗はほん
の一瞬で、ガメルの予想外の力にオーガストランザーを押し返さ
れる。(パワーが予想より強い・・・！何枚メダル貯めてやがんだ・・・！)
心中で悪態をつき、オーガストランザーを握り直す。

オーガは再度、ガメルに向かって走り出す。ガメルの巨大な拳を、
オーガは無理矢理身を縮めることで回避する。回避した先に来た反
対側の拳を繰り返すことでこの攻撃も回避。

オーガのパワーがガメルよりも少し下だが、そこは幽雅の地力
で伸ばしていた。

オーガストランザーを一閃、懐を切り込む。火花を散らしてガ
メルは苦悶の声を上げる。

(歯応えが薄い。恐らく今のダメージはほぼ皆無。近距離がダメなら
——)

《Blaster mode》

ベルトからオーガフォンを引き抜き、ブラスターモードでガメルに

撃ち込む。ガメルは予想外の威力に少し退るが、それでも尚進み続ける。

ガメルの右腕とオーガストランザーが交差する。

ガメルの右腕はオーガを後方へと仰け反らせ、オーガの一撃はガメルの身体がメダルを大量に吐かせた。メダルは全て塵のように消えてなくなった。

「ウガアアアアアアア！」

「しまっ——！」

ガメルはメダルがなくなったことに怒り狂い、オーガに無理矢理な攻撃をする。オーガはオーガストランザーでガードするが、あまりのパワーにフェンスへと叩きつけられる。

「ウガアアアアアアア!!」

「ガバツ！」

ガメルの連撃。両の拳による重量のある攻撃は、オーガに確実に当たっていき、ガメルはトドメとばかりにオーガの首を掴み、ガラスの床へと叩きつける。

その結果、ガラスは衝撃に耐え切れず、オーガの体をデパート内に落下させていった。

「もく、幽雅はどこいったん！」

はやて一同はいつの間にか姿を消していた幽雅のことを探していた。幽雅の持っていたポーチがあったので、帰った訳では無いと思いい、今も探している。

「主はやて、一旦切り上げて少し休みませんか？」

自分の主の心配をしてシグナムが言う。

「うくん、ほな、少し休け——」

はやてが休憩と言いかけた時、天井から何かが降ってきた。天井から降ってきた何かは、共に落ちてきたガラスと共に地面に転がる。

何かの姿は人型だった。

黒いローブに金色のライン。赤色の複眼に、仮面で顔を隠している。一見すれば不審者だ。

はやて達の周りにいた人達はみな悲鳴混じりの声を上げる。

「全員ここから離れろお!!」

仮面の人物——オーガが声を上げる。それと同時に今度は異形の怪人、ガメルがオーガ目掛けて降ってくる。

オーガは横へ転がることで降ってくるガメルを回避。立ち上がった反撃しようとするが、ガメルの追撃の方が早く、後ろへと押される。

「ゼアッー」

オーガストランザーを一閃。今回は当たりがよく、ガメルの胸を切り裂き、ガメルは胸からメダルを零しながら転がる。オーガは追撃しようとするが気付いた。

ガメルが転がった先にはやて、シグナム、ヴィータ、シャマルがいることに。

起き上がったガメルが彼女達に狙いを定める。いくらガメルが愚鈍だからと言って、彼女達がバリアジャケットに帰る間には攻撃に移れる。

そして今回ガメルの標的になったのが——はやて。

ガメルが正拳突きのようにはやてに向けて一撃を放つ。はやては目を瞑りガメルからの衝撃に備えようとする。だがいつまでも衝撃は来ず、はやては恐る恐る目を開ける。

はやての前にオーガがガメルに背を向けて立っていた。ガメルの一撃はオーガの背中にあたり、オーガは膝立ちになる。

「ぐあああッー」

ガメルが横薙ぎにオーガを払う。そこでダメージ量が限界を超え、変身が解除され、幽雅の姿に戻った。

幽雅は少し先の壁にあたり、そのままグツタリと倒れる。頭からは血を流しており、ガラス片が体に刺さったのか、所々から血が出ている。

「幽雅!？」

はやてが駆け寄ろうとするが、その間にガメルが割って入る。シグナムは自らの武器、レーヴァテインでガメルに斬りかかるが、ガメルは動かない。

「刃が通らないだ?!」

シグナムは自分の愛剣が効かないことに驚嘆する。レーヴァティンはベルカの時代、騎士であるシグナムの唯一の武器として共に戦ってきた唯一無二の相棒。

その相棒の刃がガメルに通らないことで生まれた油断は確実にシグナムに隙を生んだ。

「避けるーシグナムー」

シグナム目掛けて放たれた拳を、グラーフアイゼンを構えたヴィータが迎え撃つ。ガメルの拳にグラーフアイゼンが負け、ヴィータも吹き飛ばされる。

邪魔者がいなくなったのを確認したガメルははやてを狙いに行く。ヴォルケンリッターで唯一動けるシャマルははやてを庇うように前に出る。

シャマルは後方支援が得意だが、近接戦闘はほぼできない。ガメルとシャマルの距離はそんなにない。

ガメルが腕を振り上げると、ガメルに向けて複数の弾丸が放たれた。

「どこ見てやがる。テメエの相手は俺だろうが」

《standing by》

《complete》

オーガフォンをベルトに差し込み、再度変身。その手にはオーガストラランザーの他にも、ブレイクガンナーが握られている。

ガメルは体を縮こませ、オーガ目掛けて突進する。オーガはブレイクガンナーで撃ちながら体をずらし、すれ違おうと同時に足を斬る。

足を斬られたガメルは転倒し、その間にオーガはオーガストラランザーをガンモードにしブレイクガンナーと共に滅多打ちにする。寸分変わらず同じ部分へと狙われた弾丸は、ガメルの装甲を少しづつだが削っていく、次第にメダルが零れていくようになった。

ガメルが立ち上がり、オーガに向けて腕を振るう。オーガは横薙ぎの腕を、オーガストラランザーの両端を掴み、真ん中で受け止める。

「言い忘れてたわ。動けるのは——俺だけじゃねえんだよ」

「紫電一閃!!」

《explosion》

背後から接近していたシグナム。シグナムはカートリッジシステムを使い、強化された斬撃をガメルの右腕へと放つ。レーヴァティンはガメルの右腕の付け根、装甲の間を切り裂き、下まで裂いていく。

「ウガアアアアア!!」

「うるせえよ」

右腕を斬られて激昂したガメルの腹をオーガストランザーで斬りつける。ガメルは片腕を失ったことでバランスを崩し、再度後ろへと転倒する。

ガメルは右腕からメダルを零しながらも、体中のメダルを右腕の修復へ向ける。その結果、ガメルの上半身の装甲が消え、茶色と黒の醜い身体が現れた。

「予想通りだな。お前の体はコアメダルではなく、セルメダルだけで形成されていた。今のお前の弱体化は単なるセル不足。鎧のないグリードなら——」

オーガストランザーを一閃。ガメルは更にメダルを零す。

「倒すのも簡単だったな」

《Xceed charge》

オーガフォンを開き、enterと書かれたボタンを押す。オーガフォンから発せられるフォトンブラッドが全てオーガストランザーへ伝い、金色の刀身が出来上がる。

「危なかったよ。お前がはやてを狙わなかったらやられてたわ——
—オラアツ!!!」

オーガが長剣となったオーガストランザーをガメル目掛けて突き刺す。ガメルは両腕で受け止めようとするが、オーガストランザーの刃を形成しているフォトンブラッドに触れると、瞬時にその腕を廃にされる。

両腕、そしてオーガストランザーが貫通している腹部から少しづつ灰となっていく。溢れ出るメダルも、地面に落ちる前に灰となり、その姿を消す。

ガメルの上半身と下半身の接合部が完全に灰化される。オーガはそこまで見ると、オーガストラランザーを斜め上に斬りあげ、ガメルの上半身を真つ二つに切り裂く。

切り裂かれたガメルは物言わぬ死体となり、爆散すらせずにその姿を灰へと変えていった。

「ハア．．．ハア．．．ハア．．．」

幽雅は変身を解くと、何度も息を整える。呼吸をする度に体が痛み、立っているのもやつとな状態。

これまでの怪人達との戦闘。幽雅は確信する。彼等が回を増す事に強くなっていることを。

幽雅はポロボロの体でメモリを取り出し、はやての方を見る。これ以上、はやてに迷惑をかける訳にはいかない。はやてだけではなく、誰にでも。

「ごめん、はやて．．．」

幽雅が掠れたような声を出す。少し話すだけで、吐血しそうな感覚に襲われるが、必死に我慢する。

「ヴォルケンリッター、はやてのことを守ってくれ」

《ZONE》

別れを決し、ゾーンメモリのガイアウイスパーを押し。はやてが何か叫んでいるが、意識が薄れてきた幽雅には何も聞こえない。

あるのはただ、緑色の記号によって視界が奪われることのみ。

それから数ヶ月、幽雅の姿をヴォルケンリッター、そしてはやては見えない。

バナナって言いたくなくなってしまおう

一枚のネットに上げられた写真。その写真についての討論は、たちまち白熱していった。

『何？これ特撮？』

『いや、マジらしいぜ。○△□？□□□□っていうサイト見てみろよ。動画あるぜ』

『見た見た！いかにも怪物！って感じの方は毎回どこかに消えるよな』

『どうせトリックなんですよ？』

『でもタキシード軍団なんてどうやって隠すの？何十人もいたんでしょ？』

『きつと地面に仕掛けが』

『てかあの仮面の人物誰だろ？』

『すごい派手だよね〜』

『現れる時ってバイクで来るらしいよ』

『へー。仮面にバイク……………』

仮面ライダーって名前はどうか？』

『おー！いいセンスだ！』

etc…………etc…………。

いつの日か、仮面ライダーの噂は世界にまで広がり、仮面ライダーを題材とした特撮が作られるほどまで広がろうとしていた。

幽雅が行方不明になってから半年。はじめの頃はみんな心配していたが、今は誰もそんな素振りすら見せなくなってきた。

…………ある1グループを除いて。

「また昨日も怪人が出たみたいね」

「ああ。最近海鳴市だけじゃなくて、日本中に出ているからな」

最初の2ヶ月は、海鳴市でよく発見されていた怪物。だが時が経つにつれて海鳴市からは数が減り、その代わり他の地域でよく見られるようになった。

当麻と美優も戦ったことがある。その時は幹部クラスではなく下っ端、ヤミーや下級オルフェノクだったため、安全に勝つことが出来た。

警察は怪人相手に未だに勝利したことはなく、毎回仮面ライダーに助けられている。政府は仮面ライダーを指名手配犯のような扱いとして、確保する方針で動いている。

「もうすぐA、Sが始まるってのに・・・」

「仕方ないわよ。今はとにかく待ちましょう」

当麻と美優は菌痒さを覚えて、仮面ライダーについての話題をなくした。

「う、うわああああああ!!」

日本の何処か。人の数が朝昼晩問わずに多いこの場所に、沢山のマスカレイドドーパントが現れた。その数は五十を超える。

マスカレイドは手当たりしだいに人を傷つけていく。そこに性別は関係なく。

「う、撃てえー!」

隊長の一言で、特殊部隊の持っている重火器から大量の鉛玉が吐き出される。それらはすべてマスカレイド達へと向かっていくが、そのことを視野に入れずに、少しづつ進軍していく。

特殊部隊は押してくるマスカレイドに少しづつ後退する。

そんな彼らを、幽雅は人気のないビルの上から見下ろしていた。

幽雅の腰には戦極ドライバーが。

「最近数が多いんだよ。少しは自重しろ」

《ブラッドオレンジ》

「変身」

《LOCK ON》

《ソイヤツ！ ブラッドオレンジアームズ》

《邪の道 オン・ステージ》

武神鎧武はビルの端に足を掛け、そのままマスカレイドに向かって飛び降りる。重力エネルギー＋全力の一振りで一番前に出ていたマスカレイドを、大橙丸で叩き切る。

「か、仮面ライダー……」

特殊部隊の面々は腰を抜かしており、皆地べたに伏している。武神鎧武はそんな彼等を横目で見て、マスカレイドの方を見る。

「ここからは……俺のステージだ」

マスカレイドが一斉に襲い掛かってくる。武神鎧武は腰にさしてある無双セイバーを引き抜き、すれ違いざまに一閃。横から迫ってきたマスカレイドに蹴りを加える。そして次の標的へと大橙丸を振るう。

武神鎧武の優先目標は攻撃を仕掛けてくるマスカレイド。無双セイバーを周りのマスカレイドに向けて撃つ。

「ホント、この武器どうなってるんだ……」

《ドリアーン》

《LOCK ON》

戦極ドライバーからブラッドオレンジと同じようにギター音が流れる。

《ドリアンアームズ》

《ミスタ〜 デンジヤラ〜ス》

武神鎧武の鎧が弾け飛び、果汁のようなものをまき散らし仲間ら、クラックから現れたドリアンが被さる。

武神鎧武——ブラーボは双剣型アームズウエポンのドリノコを弄びながら、マスカレイドに近づく。

そして一気に走り出す。前から来たマスカレイドの腹に右のドリノコを刺す。刺したまま左から来たマスカレイドに無理矢理叩きつける。

《ドリアンオーレ》

カツティングブレードを二回倒し、ドリノコにエネルギーを貯める。

「ゼアツ！」

ブラーボが両のドリノコを振るう。ドリノコからドリアン型のエネルギーが射出され、エネルギーはマスカレイド達を切り裂いていく。

《バナナ》

《LOCK ON》

「バ、バナナ!？」

《カモン！ バナナアームズ》

《ナイトオブスピーア》

残りのマスカレイドの数も考慮して、バナナアームズへと変える。後ろから特殊部隊達がバナナと言っており、幽雅は「バロンだ！」と言いたくなる衝動を抑える。

「フウっ！」

幽雅——バロンはアームズウエポンのバナスピーアを刺すのではなく叩きつける。マスカレイドの顔を強打し、数体を巻き込んで吹き飛ばす。

足を叩き、顔を掴んで投げる。荒々しい戦い方は、着々とマスカレイドを減らしていく。

《カモン！ バナナ・スカッシュ》

バロンは勝負をつけるために、カツティングブレードを今度是一回倒す。バナスピーアにエネルギーが溜まり、バロンはバナスピーアを地面に刺す。

すると地面からバナナ型のエネルギーが現れ、マスカレイド達を飲み込み、爆散させる。

バロンの必殺技、スピーアビクトリー。

バロンは爆散したマスカレイドを見届けると、姿を消そうと動き出す。突如飛来した一発の弾丸で、歩みを止める。

弾丸が飛来した方を見ると、特殊部隊がバロンに向けて銃火器を向

けていた。

「止まれ！仮面ライダー！大人しく連行させてもらおうぞ！」

彼等の目的は怪人を倒すことではない。彼等の目的は最初から、怪人相手に仮面ライダーが来るまでの時間を稼ぐこと。そして仮面ライダーが怪人を倒した後に、捕縛すること。その為なら銃火器の使用も問答無用で許可されている。

「ほう……。恩人相手に牙を剥くか」

《カモン！バナナ・スカッシュ》

すぐさまカッツティングブレードを二回倒し、バナスピアーを彼等の目の前に投擲し、二度目のスピアクトリーを発動する。エネルギー体のバナナは彼等を貫かずに弾き飛ばす。

「俺を倒したいのなら……。国一つが丸々相手になるべきだなあ」

それは過大評価ではなく、れっきとした事実。それだけ仮面ライダーは強い。そして幽雅は仮面ライダーの中でも一際強力なダークライダー。そして少し劣るサブライダー。

主役ライダー達みたいに意志の力ではなく、そのままの性能が凶悪極まらないもの。

バロンが手を掲げると、人一人分のクラックが開く。クラックの中は、森。

バロンは悠々と森の中に入っていく、クラックを閉じる。

残された特殊部隊の一員が呟く。

「仮面ライダーの拠点は……。森にあるのか？」

そんな桁外れな考えは、彼らの上層部へと伝わり、その数日後に探索可能な範囲で、全国の森で仮面ライダーの捜索が行われた。

V S ヴォルケンリッター（一人抜き）

幽雅が現在使っている隠れ家、という程でもない海鳴市にある高級マンションの最上階。幽雅はチェイスの姿ではなく、仮面ライダーゾルダ、北岡秀一の姿と名で借りていた。

部屋の中はバイク等のパーツが少し散乱しているだけで基本的には片付いていた。

その部屋の一壁、巨大なホワイトボードと地図を前に幽雅が立っていた。

先程ヘルヘイムの森を伝い、帰宅した幽雅はドーパントが出た場所、種類等を正確にホワイトボードと地図に書き込んでいた。

幽雅は行方を眩ませてから半年、全ての怪人事件を解決してきた。最初はこの世界にライダーがもしかしたらいるかも、と考えしばらく暴れさせていたが、一向に来る気配がなかったため、自分でやり始めた。

「二ヶ月に5、6回……。種類は雑魚、雑魚、本命の怪人って感じか」
一ヶ月に6回。俺普通のライダーよりも重労働なのでは？と本気で考え始めるが、すぐに頭から追い出す。

「マスカレイドドーパント、屑ヤミー、グール、インベス、ミラーモンスター、最悪な時はワーム。ハツ、平成ライダー雑魚怪人の集まりだな」

地図に点を書き込む。幽雅が今まで地図に書き込んできた点は約35個。

「海鳴市に出たのは2回だけ……。それからかなり遠い場所から少しづつ海鳴市を中心に近づいている。このペースだと、もう少しで海鳴市が主な戦闘区域か……。まるで誘い込まれてるみたいだ」

仮面ライダーWが風都で、仮面ライダーフォーゼが学園で、仮面ライダー鎧武が沢芽市でしか戦わなかったかのように、幽雅を海鳴市に近づけている。

気が滅入る、そんなことをボヤきながらパソコンを起動させ、カンドロイドを新たに飛ばす。

幽雅は転生させた神に頼み込み、監視用のカンドロイドを大量に送らせた。

ちなみに転生させた神は怪人が現れたことを認識していなかった。「こっちの問題もあるのになあ……」

幽雅がパソコンの画面に映した一つのウインドウ。

画面の中に映されているのは数日前、時空管理局での話し合いを纏めた内容。

幽雅にとつての『面倒事』。

『第97管理外世界に現れたロストロギア、またその製造者の捕獲について。』

P・T・事件の際に確認された、仮面の魔導師。正式名称は仮面ライダー。仮面の魔道士はその圧倒的な戦闘力で、Sランク魔導師である、プレシア・テスタロッサの自動人形を単独で破壊。

仮面の魔導師は我々の知らぬ、未知の魔法や技術を持っている模様。魔導師は年端もいかぬ子供だったため、未知の魔法や技術によって自動人形を破壊した模様。よつてこの技術をロストロギアと認定。それらは法の番人であり、秩序の使者である我々が持つべきものである。

よつて一週間後、第97管理外世界に魔導師の小隊を送り込み、ロストロギアを扱う仮面の魔導師『黒崎 幽雅』を捕獲することを決定。』

管理局による『残業宣言』。決め手になったのは恐らくワイズマン。

「面倒だが、怪人よりはマシだな」

画面を閉じ、壁に飾られている笛のような武器『ハーメルケイン』を手に持つ。

「魔導師共に教えてやるよ。誰を……どんな化け物を相手にしているのかを……」

送られてくる管理局の小隊に、絶望が確定した。

12月1日。幽雅はいつもの様に溢れ出る怪人の相手をしていく。今回の相手は軍鶏ヤミー。多彩な格闘技ではじめは幽雅を追い詰

めていたが、幽雅はドライブで苦もなく倒した。

そして何かと縁がある公園まで行き変身を解く。幽雅はベンチに座り誰もいない虚空へと話しかける。

「最近、物騒になったってのは本当みたいだな。なあ？」

ヴィータ

「気付いてたのか・・・」

近くの茂みからヴィータが出てくる。その姿はバリアジャケットで、その手にはグラーフアイゼンが握られている。

「半年ぶりだな。今はだいぶこすいことやってるみたいだが、そこら辺はどうなのよ？」

「・・・ッ」

知られている。ヴィータ達がやっていることを。闇の書の侵攻が早まり、はやての命のためにリンカーコアを蒐集していることを。

それが、はやてに禁止されていることでも。

「はやてに禁止されていてもやる・・・大方、はやてはもう長くないみたいだな。あの時の乾と同じか・・・」

まあ、それよりもやるんだろ？シグナムとシャマルが居て、餌である俺がいる。

やるしかねえよな？」

「分かってんならさっさと蒐集されやがれ!!」

「ちっ！ロリガキが！」

《DRIVE type NEXT》

ヴィータの突撃を幽雅はドライブに変身した時の余波で弾く。だが横からはシグナムが迫る。

「ハッ！」

「そんなに奇襲が嫌いかな？横からなんて優しいな!!」

シグナムの剣をブレイドガンナーで受け止め、腹を蹴る。シグナムは予想以上の痛みに顔を歪めるが、ドライブは容赦なく2激目の蹴りを入れる。

「オラァっ！」

見ていられなくなったのか、ヴィータがさらに突撃。ドライブはブレイドガンナーで、グラーフの柄を撃つ。

「余所見をするな！」

「あめえよ」

立ち直ったシグナムがレヴァンティンでドライブを斬ろうとするが、ドライブは体を急回転してブレイドガンナーを打ち付ける。

「どうした？お前はどの程度か？それなら、ベルカの騎士というのは、どれだけ弱い集まりなんだ？」

ドライブの言葉にシグナムがさらに剣を押す。これは挑発だと分かっているのに、シグナムは止まることが出来なかった。

ドライブはシグナムの行動を逆手に取りブレイドガンナーを引いて、シグナムに足をかける。シグナムとて歴戦の騎士だが、今の彼女に小手先の技は通じやすい。

足をかけられてバランスを崩したシグナムの横からヴィータが来るが、ドライブはグラーフを体を逸らすだけで避け続ける。

「いい加減・・・当たれやあ！」

ヴィータの大振りな一撃。ドライブは体を前に送りグラーフの内側へと入り込む。

そしてヴィータの腹部にブレイドガンナーの銃口を押し付け、ドンドンドンドンドンドンドン。

容赦なく連射する。ドライブが非殺傷設定を使っていたから死んではないし傷もないが、痛覚を刺激する弾丸は止まることを知らない。

気絶したヴィータをシャマルがいるであろう方向に投げ捨て、剣を構えるシグナムを正面に、シフトカーを手取る。

《タイヤコウカーン！》

《MAX FLARE》

炎を象ったタイヤがドライブの胸にかかる。それと同時にドライブの手足から炎のようなものが発せられる。

「ハアアアアア！」

シグナムはレヴァンティンを蛇腹剣にしてドライブへと向かう。

対するドライブはファイティングポーズとなり、カウンターを狙う。遠くから放たれた剣先をドライブは手で掴み引き寄せるように後ろへと引つ張る。逆にドライブ自身は少しづつ前へと踏みでる。

シグナムは掴まれたレヴァンティンを必死に動かすが、ドライブの筋力には適わず、至近距離までの接近を許してしまう。

しかしその時、シャマルの魔法、時の旅路がドライブの足を止めた。ドライブとヴォルケンリッターでは勝利条件が違い、ヴォルケンリッターはリンカーコアを入手できればいいだけ。

ドライブはレヴァンティンを掴んでいる手を離し、炎の拳でシャマルの腕を弾く。

その隙に自由となったシグナムがレヴァンティンを長剣に戻し、接近する。

シグナムの長剣をドライブは炎の拳でいなす。何度も何度も、同じように左右に流す。

ドライブが右腕を左腕に添える仕草をする。シグナムはそれを隙とみなし、己が技を放つ。

「紫電———一閃!!」

《explosion》

ベルカ式デバイスのカートリッジシステム。強力な一撃と化したレヴァンティンはドライブへと襲い掛かる。

《FLA FLA FLARE》

ブレスのレバーを三回倒し体の炎を増加する。ドライブは炎を全て右拳へと溜め、紫電一閃と相対する。

「ハアアアア!!」

「オラアッ!」

炎を纏った二人の一撃がぶつかり合い、光を発する。熱は地面を焼き、光は全員の視界を奪う。

光が消え、シグナムとドライブの姿が明確に映る。

ドライブの右拳はシグナムの腹部に入っており、シグナムのレヴァンティンはドライブの肩を浅く切り裂いている。

ドライブの肩を切り裂く代わりに、ドライブは左腕でレヴァンティ

ンを抑えている。

シグナムの腹部から腕を離し、そのまま体をずらす。
支えを失ったシグナムは地面へと倒れ伏す。

「お前では、俺には勝てない」

気絶しているシグナムにドライブが言い聞かせる。

「俺はお前と違って、守りたいものがないからな」

ドライブの近くにネクストライドロンが止まる。ドライブは変身を解いてネクストライドロンに乗り込み、その場をあとにした。

静かなる対立

いつも幽雅は基本的には外食はしない。

体造りを日頃の日課にしている幽雅は自分でカロリー量を調整しながら、主婦も真つ青になるくらい自炊している。

そこに栄養バランスを気にする必要などなく、まさに日本の食事と言える。

これだけ言うと、幽雅が外食をあまり好んではないように聞こえるが、別にそんなことは無い。

幽雅は自炊可能なら自炊する、と決めているので外食をしないだけなのだ。

つまり、自炊出来なかつたら外食する、ということ。

そして幽雅が外食するのに当たって、最も多い例は、

「カンドロイドの整備のせいで材料買うの忘れてた・・・」

つまるところ、幽雅も人間なのだ。

海鳴の都市方面にあるファミレス。幽雅は4人がけの席にたった1人で座ることにより目立っていた。

目立った理由は今の幽雅の姿が、チエイイスということもあるだろう。

(本当にダミーメモリ様々だな)

食後のコーヒーを啜りながら、窓から見える人の波を見る。大勢より一人が好きで幽雅にとつて、外の人混みは苦手そのものである。

そんな人混みの中、幽雅のいるファミレスに近づき、入ってくる一人の人間が目付いた。正確には、その人間の髪色に。

そしてその人物と一緒にいる三人の人間も。

(何故いる？ 裁判が終わったからか？ それなら何故、リンディ・ハラウンとクロノ・ハラウン、それにフェイトとオペレーターまでいる？)

幽雅の目に付いたのは管理局にいてと思われた四人。フェイトだけなら分からなくもない。だが何故、その他の三人がいるのかが分か

らない。

(今出たら危ない。ここは冷静に、奴らが居なくなるか、隙を見て逃げるんだ……！)

幽雅は少し目立つが、どこかにバイクを出して帰ろうと決意した。

しかし彼女達は幽雅の席の近く、8人用の席に座った。そして幽雅の人よりもすぐれた聴覚が聞き取った。

(あと四人来るだど……!?クソ、恐らく高町なのは、衛宮当麻、夢原美優にフェレットか……！)

これで幽雅は下手に逃げられなくなった。幽雅は変身する時、数瞬とはいえ今の姿、チェイスへと肉体を構成する。

更には子供の状態がチェイスを幼くしたような姿なので、下手しなくてもバレる可能性が高い。

(どうにかして他の四人が来るまでに店を出なければ……だがどうする?)

幽雅の座っている席からレジまではそれなりに距離がある。歩く時間、今着ている紫の派手な服、支払いの時間。

(姿を変える? いや、定員に何度も見られている。それにここは人の目があるから迂闊に姿が変えられない)

そして、悪魔が来る。

「えっと、待ち合わせしてるんですけど」

幽雅の耳にも聞こえたソプラノの声。間違いない高町なのはの声だ。その後ろには確かに他の三人の姿が見える。

(クソ！)

なのは達がフェイトたちの席に行くとき、必ず幽雅の座っている席を通る。つまり当麻や美優も一緒に通るということ。幽雅はなのはとフェレットならともかく、この二人から逃げる自身はなかった。

咄嗟に窓を向いて必死に顔を隠す。それと同時に誰とも繋がっていないスマホを耳に押し当て、あたかも電話中のような雰囲気を出す。

結果、四人は気付かずに通っていった。幽雅は安堵しながらも、店からでる隙を探る。

「始めにあなた達に伝えなければいけないことがあるの」

ふと、リンデイの声が幽雅の耳に聞こえる。なぜ聞こえたかという
と、彼らの雰囲気に対して、リンデイが暗い声で話し始めたからだ。
「管理局上層部の決定により、『黒崎 幽雅』をロストロギア開発者として捕獲することが決定。並びに彼の持つロストロギアを全て管理局が引き取ることが決定しました」

「捕獲って、どうして!？」

(成程、リンデイ・ハラオウンが地球にいる理由はそれか。高ランク魔導師であるコイツらを管理して、あわよくばコイツらの力を使って俺の事を捕獲……。そしてライダーシステムを量産させるって所か？
ついでに『お前の技術力を管理局のために使わせてやる。光栄に思っただけ』とも言われそうだな)

その時は管理局を破壊するが、と考えながら彼女達の話を聞く。

「彼の扱うベルト、アレは私達の知らない未知の技術が使われています。そしてその技術がロストロギアと同クラスのもの、という名目で彼の技術力を本部が欲しているだけです」

(ハッ、その言い方じゃ自分は反対していますって感じだな)

幽雅は最後のコーヒーを飲み、どうでもよくなり会計のために歩き出す。

「いたのか、黒崎!」

やはり声をかけられる。声をかけたのは当麻。大声で叫んだせいで周りからの視線に晒される。

「どちら様だ？俺は黒崎なんて名前じゃないが？」

幽雅は白を切る。バレてることは分かっているけど、幽雅本来の容姿ではないので、人違いですむ。

「聞いていたんですね、黒崎 幽雅君」

「あなた、半年間もどこへ行っていたの？」

リンデイと美優が席に座るように目で訴えかけてくる。幽雅としては他人と貫きたかったが、既に逃げられる空気ではない。

幽雅は座らずに席の端に立つ。クロノは幽雅の事を睨みつける。
当然だろう。今や幽雅はロストロギアを創り出せる管理局の敵の一

人。執務官であるクロノの敵である。

「楽しい楽しい怪人退治。魔導師じゃ手も足も出ない・・・な」

「・・・ッ！」

遠回しに実力不足と言われて激昂するクロノをリンデイが手で制する。

「俺を捕らえたいなら好きにしろ。まあ、その時は手加減なんてする気はないがな。俺を撃つんだろ？つてことは撃たれる覚悟もあるつてことだ」

幽雅の体から殺気が発せられる。事実、幽雅は手加減などしない。手加減や慢心は我が身を滅ぼすことを知っているからだ。

「俺が・・・お前を止める」

当麻が立ち上がり、幽雅を睨む。今の二人では体格差に大きく差があり、幽雅が当麻を見下ろすという形になっている。

「前みたいに引き分け・・・なんて出来ると思うなよ？」

幽雅の体は日々全盛期へと戻っている。足りない分の筋力や体力は戻り、衰えていた対人戦の勘も戻ってきている。

『壊れた幻想』を回避するなど、簡単すぎるほどには。

幽雅はフェイトを一瞥して店を出る。一言も話さず、常に幽雅を見続けていたフェイト。

二人は敵同士。

それをこの場で体現していた。法の番人のフェイト。法を正面から壊す幽雅。立場が水と油のように違う二人。

近いうちに、二人は戦う。お互いの意思をぶつけ合うために。

その前座が、この場で終わった。

魔導師へ恐怖を

12月12日。

この日、原作通りならフェイトが蒐集される日。確かにフェイトはヴォルケンリッターと戦っている。だがそれは管理外世界での事。アースラクルーもフェイトの戦いを見ている。

故に気付かない。地球で管理局の精鋭と、たった一人の人間が戦うことを。

果たして誰が、彼らに気付くのだろうか。

白黒の色が抜け落ち、現実から隔離された世界。幽雅は一人、道路に立つ。車は通らず、人気もない。

周りを気にせず全力で戦える。

「黒崎 幽雅。ロストログリア製造の疑いで逮捕する。大人しくしてもらおうか」

ビルやビルの合間から出てきたのはバリアジャケットを纏った数十人の魔導師。彼等の中にBランクはごく一部で、殆どがAランクからSランクで構成されている。

「やはり管理局はバカだな。魔法があるからって自分が全て正しいと思ってる。正直、イライラするよ。——変身」

《チェンジ ナーウ》

幽雅の体を魔法陣が通る。現れたのは白いローブの仮面ライダー、ワイズマン。ワイズマンは両手を広げ、魔導師達を挑発する。

「貴様……全体、一斉射撃!!管理局に逆らったアイツを捕獲しろお！」

隊長だと思われる人物の声とともに放たれる色とりどりの魔法。砲撃魔法、バインド、ありとあらゆる魔法がワイズマンを襲う。ワイズマンは両胸の脇にある指輪を一つ取り、ドライバーに翳す。

《テレポート ナーウ》

ワイズマンの足元に魔法陣が形成され、ワイズマンは魔法陣に沈むように消える。直後、ワイズマンが居た場所を魔法が襲いかかった。

ワツと体から流れ出る。

「リンカーコアを……直接砕いたのか？」

「正解だ。まあ、正確には魔力防御等、魔力が使用されたもの全てを切り裂く、だがな」

その言葉を聞いて、彼らは一斉にこの場から逃げたくなる衝動に駆られる。防御をバリアジャケットに頼りきっている彼らとワイズマンの相性はとてつもなく悪い。

ワイズマンの持つハーメルケイン、これは本来、賢者の石と呼ばれた特殊な石を人体から取り除くために作られたものだが、幽雅はこれを改良し、新たに機能を加え、魔導師相手に破格の強さを与えた。魔導師の使うバリアジャケットの存在を否定するような機能、魔導師の力の源であるリンカーコアを直接砕ける。

それだけならまだいい。遠距離魔法で近づかせなければいいだけの話だ。だがワイズマンは二人目の時に、その圧倒的なスピードを見せつけた。

手足が震え、唇が乾燥し、唾が出なくなる。恐ろしい。なぜ自分達はこんなのを相手にしなければならぬ。そう思って仕方が無い。

管理局でエリート街道を歩んでた彼等に送られてきた一つの任務。ただの子供一人捕らえる簡単な仕事だと思っただけで受けた自分を殴ってやりたい。

《エクスペロージョン ナーウ》

新たに魔法陣が描かれる。今度は彼らを囲むように、空中に特大の魔法陣が。

「プロテクション！」

全員が防御魔法を張る。なぜ逃げなかったのか、それは魔法陣を見れば明確にわかる。魔法陣の大きさは、直径20mほど。その巨大な魔法陣が軽く数えて50。

魔法陣が爆発する。爆音、爆熱、爆風。ありとあらゆる可能性が魔導師を襲う。爆発は中心にいる魔導師を満遍なく飲み込み、彼らの命を奪っていく。

彼らは認識を間違えた。相手は確かに一国の軍隊よりも強い。巨

大で複数の爆発する魔法陣。圧倒的な速度。

次元震を起こさないロストロギア？そんな軽く見ていいものじゃない。管理局の魔導師をひねり潰し、その管理局が手も足も出ない怪物を容易く消す。

爆発からは何人か生き残ったが、彼らは最早抵抗する気力も残されていない。当然だろう。

自分達が最強だと考えていた途端に、全滅寸前まで追い込まれる。

「こ……こんなもの……認めてなるものか……！」

「憤りを感じても、結果というものは変わらん。シッ！」

「ガギャアアアアアアアアアアアア!!」

また一人、ハーメルケインの犠牲となる。ワイズマンの白いローブは血に濡れ、その仮面の輝きはオレンジから血色へと変わっていく。

「管理局に……応援を頼んだ……！貴様はもう逃げられない！」

「そうか。どうでもいいから諸共に死ね」

《イエス！キックストライク！アンダアスタアンド？》

ワイズマンはキックストライクリングをベルトに翳し、右足に魔力を溜める。それを直感的に危険だと判断した魔導師達は逃げようとするが、ワイズマンはそれを許すほど甘くはない。

《チエイン ナーウ》

空中に魔法陣が現れ、鎖が飛び出し彼らを縛る。逃げようにも解けず、相当な魔力が込められていることが伺える。

「終わりだ」

ワイズマンは飛び上がり、必殺のストライクエンドを放つ。超速で加速したワイズマンは魔導師達にすぐに到達し、その右足で彼らの命を破壊する。

「絶望がお前達のゴールだ」

結果が解けそうだったので、ワイズマンが支配権を乗っ取り、内部を修復する。辺りには魔導師達の死体が残されており、殆どが無様に倒れている。

「ハーメルケインだけじゃなくて、『銃剣』の実験もしておけば良かった。失敗したな」

ワイズマンは思い出したように呑気なことを呟き、死体をどう片付けるか思考する。

「まあ、これしかないか」パチッ

指を弾き、灰色のオーロラを出現させ、死体を飲み込ませる。オーロラが消えると死体も消え、綺麗さっぱり片付いていた。

ワイズマンは変身を解き、空——アースラがいるであろう方向に顔を向け、宣戦布告する。

「これが俺のやり方だ、正義の味方達。俺は敵に手加減はしない。人質を取るとか考えても無駄だ。今の俺に友や親しい者などいない」

時空管理局。確かに面倒な組織だが、所詮幽雅にとっては面倒止まり。真に幽雅に——ライダーにとつての敵というのは、怪人、もしくはライダーにしかたれない。

「俺を捕まえたのなら、もっと本気がかかってこい。それこそ、世界の命運を背負って、少しでも足を踏み外したら、自分含めて世界ごとゲームオーバーって位にはな」

「甘い考えで戦うな。止めたいのなら殺すしかない。平和的解決を求めるな。力があるなら力で解決しろ」

殺すことが出来ない敵に向かって、優しく話す。何があっても自分の敵となり、自分の前に塞がる敵へ。

仮面ライダーは人々の、自由の味方だが、幽雅は違う。間違いなくそう言える。問われた瞬間に頷ける。

自分は悪だと、正義ではないと心に思い、願っているからこそ、幽雅はダークライダーとして生き続ける。

幽雅が最初に憧れたのは魔進チェイサーであって、ドライブでも、仮面ライダーチェイサーでもない。

正義を鼻で笑い、当然のように誰かを傷付ける、革新的な悪に憧れたのだから。

《テレポート ナーウ》

結界を解くと同時に、テレポートする。幽雅は消え、そこには新たに人が通り始める。

この日、管理局はアースラに、アースラ所属の魔導師達に黒崎 幽

雅への接触禁止令を出した。

クロノ、大地に立つ

最後に涙を流したのはいつだろうか。

擦り切れ、磨耗された記憶には、涙を流した記憶がない。涙だけじゃない。心の底から笑ったのはいつだろうか。誰かの悲しみを、正面から受け止めたことはあるのだろうか。

分からない。

生と死を繰り返して、先の見えぬ輪廻で蠢く自分はなんだ？

『俺』と『僕』、どちらが本物だ？

顔も覚えてない両親に愛されてきたのはどっちだ？

そんな記録はもう残っていない。

何故こんなに苦しいのだろうか。胸が痛むのだろうか。

その答えを、人間性が消えかかっている俺は、永遠に知ることは無い。

「大分面倒なことになっているようで」

幽雅がいるのは何度目かもわからないビルの上。ここらでは高い方のビルに登ったので夜景が綺麗に見える。

その奥にあるドス黒い魔力も。

「俺もやらなきゃダメか——ツ!」

幽雅が言いかけるとその場から飛ぶ。その瞬間、幽雅がいた場所に魔法が叩き込まれた。幽雅は器用に空中で回転して着地する。

幽雅がいた場所には二人の仮面の男が立っている。

「俺の真似か？ 悪趣味すぎて笑えないぞ」

幽雅が右拳を前、左拳を後ろにファイティングポーズをとる。仮面の男達もそれぞれが構える。

「ハアッ！」

幽雅が仕掛ける。仮面の男達は二人に分かれる。幽雅が見た限り格闘に優れているのは片方、残った方だけ。

仮面の男は幽雅の拳を紙一重で躲すら幽雅の予想よりも速い拳に

驚きながらも体を捻り蹴りを入れる。

幽雅は持ち前の背の低さを利用してしゃがみ込むことで回避。立ち上がり肘、膝、腹部、関節と言った様々な部位を掌底のみで攻撃する。

体を回し、足を組み替え、反撃を流し、的確な部位を割り出す。幽雅の武術は我流だが、幽雅は別に武術をしていない訳では無い。

幽雅はボクシング、空手、合気道、柔道、八極拳、カポエラ、ムエタイといった様々な武術に精通している。その中で、自らが最も得意とする部位を切り取り、結合させ、戦闘の中で最適化させてきた。

幽雅の掌底が仮面の男の肘にモロに当たる。肘からは骨が折れた音が鳴り、ただ折れただけでは起こらない激痛もする。

「そら、次だ」

今度は掌底に見せかけての横腹を狙った横蹴り。銃弾、とはいかなくてもかなりの速度で叩き込まれた蹴りの感触は、常人ならば倒れて当然の威力を誇る。

「見えてんだよ」

もう1人の仮面の男が放った魔法をバク転で避ける。幽雅がまとも立ち前を見ると、仮面の男が仮面の男を庇っているというシュールな光景が広がっていた。

「どうやら、時間切れのようだな」

幽雅が仮面の男達の後方を見てその場から飛び跳ねる。すると仮面の男達にバインドの魔法がかかり、幽雅のいた場所をバインドが通った。

「久しぶりだな。クロノ・ハラオウン」

「黒崎 幽雅。君を逮捕する」

スーパークロノタイムが始まる。

「グウっ！」

「当麻君！」

幽雅から離れた場所。そこでは激戦が繰り広げられている。当麻の投影をもともせず魔法を放ってくる闇の書の闇。

美優が援護するも、相手との実力差が現れすぎて通用しない。

「デイバイン——バスター！」

なのはの新調されたデバイス《レイジングハートエクセリオン》からピンク色の砲撃魔法が放たれる。なのはのレアスキル《収束》を通して放たれた砲撃は闇の書の闇に回避を選択させる。

「シユート！」

美優の持つサファイアから蒼色の魔力弾が放たれる。なのはの砲撃とはいかなくてもなのはの魔法と違い数が桁違い。

『Diabolik emission』

闇の書の闇が腕を掲げるとドス黒い魔力が集まる。集まった魔力は弾け飛び、魔力弾を消し去っていく。美優は不敵に笑う。彼女の本命は別にある。

『我が骨子は捻れ狂う』……『赤原猟犬』！』

背後に待機していた当麻が黒弓で赤い矢を放つ。矢は獣のように不規則で生物的な動きで闇の書の闇の放つ魔法をくぐり抜け、本体にあたる。

「くっ！ダメか！」

当麻が歯噛みする。矢を撃った本人だから分かる。アレでは倒すどころか、ダメージすら与えていないと。

煙が晴れるとそこには変わらずに闇の書の闇がいる。闇の書の闇はダメージを与えた、と言うよりも攻撃を当てた、というところに驚いているように見える。

「ほう……私に攻撃を当てたか。ではこれはどうかな？」

『Bloody dagger』

『熾天覆う七つの円環』！！』

鮮血のように放たれた魔法を、当麻が宝具で守る。だが『熾天覆う七つの円環』の花弁が次々とヒビ割れ、遂には全て砕かれる。

「ガアアアアアアア！！！！」

魔術回路から負荷が逆流し、当麻の体を痛めつける。魔術回路が熱を放ち、今すぐ倒れたくなる衝動に駆られるが、どうにかして意識を保つ。

今のを耐えたか。ならばは——ッ！」

闇の書の闇が言いかけるとピンク色の砲撃が飛んでくる。闇の書の闇は防御魔法で防ぎ、砲撃の方向を向く。

「当麻君はやらせないのー！」

主人公は勝つまで終わらない。

「弱いな。この程度か」

「グアツ・・・うつ・・・」

幽雅とクロノの戦闘。それは一方的なものだった。幽雅は変身すらせずに、ハーメルケインとウイザーソードガンでクロノを圧倒し、地に伏せさせた。

「まだ・・・僕は・・・まだ・・・」

「分からないな。勝てないことがわかっているのに、何故抗う」

立ち上がろうと身をよじるクロノを上から見下ろす。クロノには哀れみの目が向けられていた。

片や満身創痍で、片や無傷とはいかなくてもほとんどダメージはなし。

「僕が・・・管理局の執務官だからだ・・・！」

クロノが完全に立ち上がる。バリアジャケットは所々が破け、全身に激痛が走っている。だがクロノは倒れない。それは自分が管理局執務官であり、この事件に関わったものだから。

「そうかよ」

「グアツ！」

幽雅のハーメルケインをデバイス『S2U』で防ぐ。だが体のダメージが限界に来ており、抵抗虚しく弾かれる。

「諦めろ。お前程度では俺には勝てない」

幽雅の言葉がクロノの胸に刺さる。クロノは地球に来て才能の差を知らしめられた。わずか数ヶ月しか経っていないのに自分より優秀な魔導師。

レアスキルを行使して自分よりも多くの戦術が取れる魔導師。

クロノは管理局で自分の力に自信があった。それは過大評価では

なく、客観的に見てそう思えた。だがその自身は無惨にも打ち砕かれた。

今もそうだ。目の前の少年はデバイスを使っていないのに、自分が負けている。クロノは劣等感に襲われる。

「ツー……これは……闇の書の闇の魔力か？それにしてはさつきよりも……」

幽雅が高いところに上り魔力の方向を見る。そこには巨大な怪物がいた。

「アレは……マズイな。下手したら地球が消滅か？」

幽雅は闇の書の闇の状態を見て思考する。幽雅の持つライダーで、現在の状態の闇の書の闇に勝てるのは恐らく一つだけ。そのライダーは今生で一度も使ってなく、真の意味で切り札と呼べるライダー。

「クロノ、俺はアレを止めてくる。お前は どうする？」
「……」

クロノは何も答えない。幽雅はそんなクロノを一瞥してこの場から離れようとするが、あと一步のところで踏みとどまる。

「劣等感など抱くだけで無駄だ。そんなもので何も変わらないし、変えられない。劣等感を抱き続けるのもいいが、少しは全部忘れて戦ってみたらどうだ？そうじゃないと壊れるぞ？」

クロノは「お前に何がわかる！」と叫びたくなった。だがそんな気力も残されておらず、ただ幽雅の言葉を聞いている。

「戦わないと大切な何かは守れないぞ。失いたくないなら、生き残りたいのなら、戦えじゃないと。後で後悔するからな」

それだけ言うと幽雅はどこかへと走り去っていく。取り残されたクロノは上半身を起こし、拳を地面に打ち付ける。

「分かってるんだよ。そんな事くらいは……」

「僕は僕が嫌いだ。こんな劣等感しか抱けない僕が……僕は心底大嫌いだ」

「でも死にたくはないんだ。死んだらそこで終わりだから。死んだら僕が僕を認められなくなるから」

クロノ・ハラオウンは立ち上がる。悔いのない結果を残す為に。
スーパークロノタイム、ここに再び。

諦めなければ終わらない

「どうにかして間に合ったか……。まあ、あの怪物を相手にするのは骨が折れそうだが……」

幽雅が一度隠れ家に戻り、『とあるベルト』を持ってきた頃には、闇の書の闇は完全な特撮系怪物へと変貌していた。

幽雅はギリギリ認識されないであろう場所に行き、メテオスイッチを取り出し、神へ連絡する。

『いやあ、第2期も終盤だけど……。なにか相談ごとかい？』

「知っているなら話してもらおうぞ。はやての救い方を」

神の軽薄そうな声を流し、幽雅は怪物の心臓部と思わしき部位を見つめる。

『彼女は今はあの怪物の中に入っている。正確には、細かい魔力に分解されて入っているんだけどね』

「助ける方法は？」

『君の持つ武器で貫けば、いけるんじゃないのかな？それに、今回はあのベルトを使うつもりでしょ？』

「お見通しなんだな」

『これでも神だから』

ワツハツハ、という笑い声を聞き流し、幽雅は懐にあるベルトを、服の上から触れる。

『最後にサービスだ。君の大切なフェイト・テスタロッサは、あの怪物の力で夢の中だよ』

そう言い残し神は通話を切った。幽雅はあたりを見渡すと、確かにそこにはフェイトがいる。まるで物のように。

「夢……希望……」

幽雅が持つ一つの指輪。それは一度も使ったことがなく、仮に今回このことで使えるかすら分からない。

「やれるはずだ。ワイズマンは……。絶望と希望を司るライダーだ。たとえ偽者の俺が扱ったとしても、変わらないし変えられない」

《シャバドウビタッチヘンシーン》

《チエンジ ナーウ》

鐘の音と共に幽雅の姿がワイズマンへ変わる。今までとは違い、幽雅は今回戦うのではなく、助け、希望を与える。

かつて世界に幾多もの絶望を与えてきた幽雅は、たった一人の自分を変えてくれたかもしれないモノのために戦う。それは始めてのことであり、今後の幽雅に多大なる影響を与えるだろう。

目を覚ますと緑が目に入る。フェイトは周りを見渡し、目を見開く。フェイトが見た方には既に死亡したフェイトの母親、プレシア・テスタロツサが座っている。

更にはプレシアの傍には、かつてフェイトのデバイス、バルディツシユを作成した使い魔のリニス。

分かっている、これは夢だと。だがフェイトにとっては甘美でいつも夢見ていたこと。

「何してるのフェイト？早く行こうよ！」

後ろから来た人物に腕を掴まれる。掴んだのはフェイトのオリジナルとも言える人物、アリシア・テスタロツサ。

夢に逆らえない。この夢はフェイトが心の底から望んだこと。家族と共に生きていきたい。

アリシアに腕を掴まれながらプレシア達の元へ向かう。分かったのだ。これがフェイトの一番の幸せの形だと。ならばこのまま夢を見続けていてもいいではないか。

フェイトにとって家族とは麻薬と同じ存在だ。今ではリンディヤクロノという義理の家族がいるが、それでも最後まで愛していたプレシア達には勝てない。

フェイトがプレシアに向けて手を伸ばす。それと同時に、この甘美なる最愛の夢に、亀裂が生まれた。

「フェイトー！起きなさいよーフェイトー！」

美結がフェイトのことを揺らす。フェイトは闇の書の闇の魔法により、夢に飲み込まれた。眠り続けている時間が原作よりも長い事

で、戦闘時間が伸びていく。

ただでさえ原作よりも強力と化した闇の書の闇で大量の魔力を使わなければいけないのに、アタッカーが一人減った。

フェイトは置いておくことなど出来るはずもなく、魔力に制限がない美結がフェイトの事を守り続けている。サファイアの防御魔法は何度も碎け、その度に張りなおしている。

今も尚、当麻となのはは戦い続けている。だが戦場を舞っていた剣も数が減り、ピンク色の砲撃も医療が減少している。

美結は万能型だ。それ故に戦闘に特化しているわけでもなく、悪く言えば中途半端。

当麻は近中距離のエキスパート。なのはは砲撃の名医。

フェイトだってそのスピードは目を見張るものがある。

だが美結の心を蝕んでいるのは彼らではなく、たった一人の転生者。自分と同じ万能型なのに、自分とは違い完璧に全てをこなす。

自分だって戦いたい。でもダメなのだ。中途半端な自分で。彼らの足を引っ張ることしか出来ないのだ。

『マスター』

「分かっているわ。サファイア、ありったけの魔力を全部防御魔法に注いで。強度じゃなくて、何回でも張れるように」

「邪魔するぞ」

「——!？」

突然魔法陣から現れたのは白い魔法使い、仮面ライダーワイズマン。

「今更、何のようかしら？」

「お前に用はない。どけ」

フェイトを庇うように立つ美結をワイズマンは押し退け、フェイトの傍まで行き、しゃがみ込む。ワイズマンは胸についている幾多もの指輪の内の一つを手取る。

「すまないフェイト。お前の希望を、俺は砕く。恨んでくれても、憎んでくれても構わない。それでもいい。だから——

——俺にお前を、救わせてくれ」

《エンゲージ ナーウ》

フェイトの指に指輪を嵌め、ワイズドライバーに翳す。するとフェイトの身体の上に魔法陣が現れる。

「あなた・・・何を？」

「夢原、フェイト・T・ハラオウンを守り抜け」

「私には・・・無理よ」

顔を下げ、悔しそうに怒りが混じったように呟く。分かっている、この怒りは八つ当たりだと。

「お前ならできる。最後まで、希望を信じ抜け」

ワイズマンが魔法陣へと入っていく。魔法陣が完全に消えても、美結は下を向き続けている。

「・・・知ったような事言わないでよ。私は・・・私は・・・」

『マスター・・・』

美結が顔を上げる。美結の双眸には今までとは違う、決意の瞳となっている。

「サファイア、全力で守りきるわよ。せめて、私に出来る最大限のことを・・・！」

燻っていた炎がガソリンが投下されたかのように燃え上がった。

彼女は、夢原 美結は友人が戦い続けている限り、終わらない。